

短小包茎

寝取られた

サーヴァント

総枚数368ページ

.....もっとうちやんとやってくれって？

駄目ですね、ただでさえこんな腐れ包茎短小ゴミチンポの処理を
させられているのにこれ以上の譲歩はできません

はあ...他の人達にはちやんとしてるんだからって...
マスターは何か根本的に分かっていないようですね

今、カルデアはあの人に来て大きく変わりましたよね

……あたりですあの軽率なヤンキーみたいな男です
女性サーバントたちはご主人様の手によって徹底的に快楽を
教え込まれ、あなたを想っていたサーバント含め全員
身体も心もあなたからあの人に寝取られてしまいました

ですがいくら絶倫とはいえご主人様の体は一つしかありません
だから体を持って余したサーバントたちはカルデア職員に
手を出し始めた、それが今の現状です。

確かに最初はあのあなたが言う横暴な口のな方を悪く言う人たちは沢山いました。勿論私もあの粗暴そうな風貌から警戒もしていましたし

なのは何で？って……知っていますか？

あの人……とてもおチ○ポが大きいんです。

根本まで啜えられないほどの大きなおチ○ポ

それに抱きしめられた時のあなたとは違うとても男らしい臭い……♡

その二つを知って初めて私たち雌が恋すべき雄の存在がわかったんです

勿論あの子の魅力に気が付かずすぐに堕ちない子たちもいました。でも、一度レイプされ、二度三度と繰り返せ誰だつて気付かされる。



ええ、確かに最低な行為です。
しかしあくまであの人のにとってそれは最終手段
ほとんどの子は女性慣れしたあの人に口説かれ、ほんの一瞬の隙を突いて
関係を結ばれてしまいます。
あとはなし崩しに何度も肌を重ね、いつの間にかあの人なしでは
生きていけない体に調教されてしまうんです。

信じられない、そんな事で皆があいつに心を許すなんて思ってますね。
ふふ、じゃあわたしがあの人に堕ちた経緯を説明しましょうか？

わたしはあの人が初めてカルデアに来た時、戦いの準備も
レイシフトもしない、ただ遊んでばかりの彼がこの世界を
救うのかとずっと疑問に思っていました。

そんな彼がある日からわたしの事を目に付けるようになったのです。初めは「可愛い」とか「一緒にいたい」とかいかにも軽薄そうな彼が言いそうな事をわたしに投げかけ誘われていましたね。

そんな彼を拒絶し続けることに疲れ、ある日彼の誘いに乗ったことがあるんです。

……ただお茶を一緒にしただけですよ。流石にわたしもそこまでの身の軽い女ではありません…あの時は。

話してみると意外にも気の使い方が上手でいつの間にか楽しく談笑していましたね。

その日からあの人とお茶する機会が増えました。



あの人、とても引き際が上手いんですね。ひとしきり話が弾んだあと必ず席を立ちどこかに行くんです。

残された私はもつと話しててもいいのにと思うようになってしまいました。今、思えばあ那个时候からあの人への警戒は完全に解かれてしまった。むしろ惹かれてしまっていたんですね。

いつの間にかあの方はカルデアに馴染み、様々なサーヴァントがあの方の近くに寄るようになりました。一番早くあの方に心を許したのはマッシュさんだったと思います。

ふふ、まるであの時のマッシュさんは恋する乙女のような顔をしてましたよ。
あの人の腕にすり寄って「せくんぱい♡♡」と甘えていました。
残念ですね
あなたはまずあの人に先輩の座を奪われてしまっていたのです。

急に彼女の態度がよそよそしくなつた日がありますよね
その時にはもう彼女はあの人に寝取られてしまっていたんですよ
情けないですね『先輩♡』。

マッシュさんを皮切りに、あの人の周りにはどんどんあなたを
慕っていたサーバントが増えていきました。

清姫さん、静謐のハサンさん、頼光さん…皆貴女の事を
想っていた子ばかりですよ。


あの人は初めからあなたを取り巻くものを全部奪って
やるうらと思つてたんですね。



それに気が付かず愚かにも簡単に奪われてしまったあなたは今何を思いますか？
今、あなたを慕うサーバントはこのカルデアに一人もいない。

あなたが一人で寂しくソチン皮オナニーをしてる頃に、私たちがあの人の上に乗る激しくぶつといオチンポで付かれていますよ。滑稽です♥情けないです♥
それでもあなたはあの人に反抗することもできない。

だって、あの人は何も悪い事はしてないのだから。



わたしたちは本当の雄の魅力を知りあなたを想うことの馬鹿らしさに気が付いただけ。情けない...もつと男らしい所をみせてくださいよ。勇気とか献身さとかそんな馬鹿らしいものではなく、雄として雌を引き付ける魅力を。

.....まあ、いいです。あなたには初めから期待してませんし。こんな短小包茎には無理な話ですね♡話を戻しましょう。わたしが寝取られた時の話でしたね.....え？もういい？駄目です、これはあなたの罰なのですから



ある日、あの人と廊下で会話をしていると急に壁際まで
追い込まれたんです。
脈絡のない事で驚きましたが「好きだ」「お前を抱きたい」と
明確な意思表示があったのでそこまでパニックには陥りませんでした。

勿論断りましたよ「気持ちには嬉しいけどわたしには想い人がいるんです」と……
……ふふ、あなたのことですよ。
でもあの人はそんな事では止まりませんでした。
ゆっくりと顔を近づけてきたのです。

あの時のキスはあの人の「本気で嫌なら拒んでくれ」という
合図だったんです。
でもあの時、わたしは男に人に追い詰められている恐怖で動けなかった。



そしてゆっくりと唇が重なり、視界があの人で染まりました。本当のキスって頭が真っ白になってしまふんですね。わたし初めて知りました。

そのまま十秒くらい経ったあとあの方は唇を離しました。しかし、それでは終わらなかった。

あの人はもう一度顔を近づけキスをねだってきたんです。そのとき、もうわたしにそれを拒否する理由がなくなりました。

不意打ちとはいえわたしはキスをしたから、あの方のキスを拒絶できなく受け入れてしまったから。



いつの間にかあの人の手は私の背中に回り、わたしもあの人の背中に手を回し、二つが一つになるくらい互いを求めあつたんです。

今ではあの時、どれくらいの間が経ったのか、覚えてません。それくらい、あの人と深く求めあいました。そしてあの人は名残惜しそうにの唇を離し「よかった」と彼は少年のような無邪気な顔で笑ったんですよ。


その時わたしの心は揺れました。動悸が激しくなり、感じたことのない疼きが下腹部に集中したんです。



いつの間にかあの人の手は私の背中に回り、わたしもあの人の背中に手を回し、二つが一つになるくらい互いを求めあつたんです。

今ではあの時、どれくらいの間が経ったのか、覚えてません。それくらい、あの人と深く求めあいました。そしてあの人は名残惜しそうにの唇を離し「よかった」と彼は少年のような無邪気な顔で笑ったんですよ。


その時わたしの心は揺れました。動悸が激しくなり、感じたことのない疼きが下腹部に集中したんです。



そのあとの流れは大体想像できますよね。
ふふ、あのひととのセックスはまるで身体が業火に包まれるようでした。
何も知らないわたしに優しく手ほどきするように、無知なわたしに
徹底的に快樂というものを教え込むように。

雄と雌、獣の様なセックスを繰り返して繰り返して繰り返して繰り返して
繰り返して……いつの間にか私は一人ベットの上で捨てられるように
茫然と横たわっていました。

込み上げてくるものはあのひととのセックスの思い出と後悔。
ああ、わたしはなんて愚かなことをしてしまったのだらうと
その場で泣き崩れましたね。



そんな絶望の中思ったのは、あなたに会いたい、それだけでした。
気持ちが発したようにあなたを欲し、焦がれ、縋りたくなりました。

しかし私の心に空いた穴を埋めたのは同じくあの人でした。
なし崩しに持ってしまったあの人のとの関係に拒否できず
何度も何度も肌を重ねいつの間にか穴は快楽でいっぱいになりました。

実際に何度かあなたの元へ会いにいったんですよ。
でもあなたは気が付いていなかった。
いつも通り優しく、臆病で、わたしを傷つけないように大事に接した。

今思えばこんなちっちゃい包茎チンポに何もできませんよね
本当に残念です。

分かりました？あの時わたしを救ってくれなかったのがあなたの罪です。

いや……ふふ……こんな……短小包茎チンポに生まれたのが
あなたの罪でしようか……ふふ……ふふ……ふふ……

大体私があの人には寝取られてしまった経緯はこんな感じ……
ほかの子もきつと同じようにあの人に寝取られたのでしよう

つてあれ？もうザーメン出しちゃったんですか？
あの人なら手淫なんかで絶対イかないのに…
短小で使い物にならない上に早漏とか本当に救いようがないですね

このあと、フェラとまあオマンコも使わせてあげようと思っただけですがどうやら手コキだけで十分みたいです、続けますよ。



……えっ？出しちゃったからすぐにはできないって？

はあく……あなたわたしをどれだけガツカリさせれば気が済むんですか
あの人は一回や二回じゃこんなふにやちんになりますよ。

もういいです、続けますよ。
こんな挿入もできないふにやちんでもザーメンを
吐き出すことくらいはできるでしょう。
あとで満足できなかつたとか難癖つけられるのも面倒ですからね。

本当にどうしようもないような人ですね、あなた今みんなに
煙たがれていることに気が付いていますか？
今日だって散々みんながあなたの悪口を言っていましたよ。

…その顔、気が付いてないようですね。まったく…
分かりました、最後にあなたが今日でかしてしまっただことを
説明してあげましょう。

あの人に来てから体を持て余すようになった女性サーバントは
カルデア職員にセフレを作るようになりました。

わたしも5人います。どの人も硬くタフで雄らしい
セックスをしてくれますよ。

そんなどこもかしこも複雑に絡み合った職員とサーヴァントの体の関係は徐々に表面化していき今じゃ場所関係なくセックスが行われています。

閉鎖的なカルデア全体が淫猥に包まれていればそれ隠す必要もないですしね。

今やカルデアはセフレの数、雄の魅力がそのまま力関係にリンクしています。

あなたはその一番下……優男で筋肉もない、顔も服もそんなにイケていない、そんなんじや雌は寄ってきませんよ

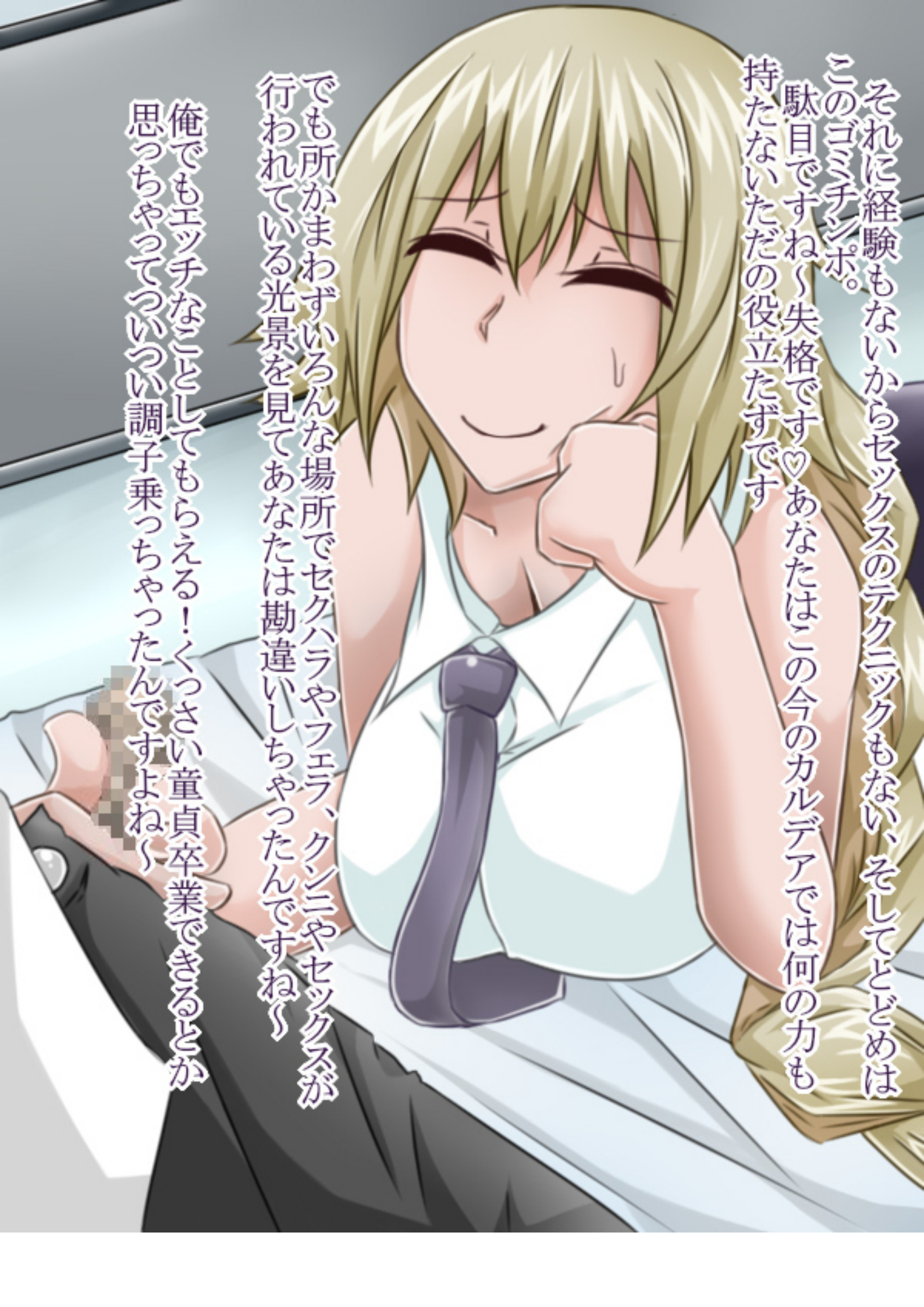



それに経験もないからセックスのテクニックもない、そしてとどめはこのゴミチンポ。

駄目ですね〜失格です♡あなたは今のカルデアでは何の力も持たないただの役立たずです

でも所かまわずいろんな場所でセクハラやフェラ、クンニやセックスが行われている光景を見てあなたは勘違いしちゃったんですね〜


俺でもエッチなことしてもらえる！くっさい童貞卒業できるとか思っちゃってついつい調子乗っちゃったんですよね〜





それで職員に頼んで女性サーヴァントを一人自分の部屋に
くるように頼んじやつたんですよね
一応世界を救ってくれた英雄のあなたの頼みだから職員は無下にはできない。
彼は苦々しい顔でわたしたちに伝えてきましたよ。

その時のみんなはポイントゴミを見るような目をしていましたよ。
勿論部屋でそわそわ待ってる滑稽なあなたに対して♡
それから女性サーヴァントで誰が行くかの擦り付け合い♡
あんなゴミと一緒にいても楽しい事なんて一つもない。
どうせしよぼいチ○ポしてるんだから一人でシコってればいいんだ〜って
散々な言われようでしたよ



一番率先してひどいことを言っていたのはやっぱりマッシュさんでした♡
それでいくから擦り付け合っても結論は出ず、結局わたしが挙手し
行くことになりました。
え？なんでそこまで来てくれたかって？
だって……それは……

誰もやりたくない仕事でも誰かがやらなきゃ駄目でしょう？
それだけです



期待してました？わたしはまだあなたの事を好きだと思っていました？
残念ながらもうあなたを想う気持ちなど粉粒ひとつ微塵もありません♡
今はあの人に夢中、あの人がいればわたしは何もいりません♡

実際本当に一人で惨めに思いながらシコって使い捨てた
ティッシュでゴミ箱妊娠させちやえばよかったですよ。

そうすればこんな面倒で退屈な仕事をしないで済みましたのに...
わたしが今こうしてあなたの汚い包茎チンポを扱っているのも
苦痛で苦痛で仕方ありません。

早くあなたのゴミチンポを抜くという仕事を済ませて口直ししたいです。
今もこの部屋の外にセフレを二人待機させてるんですよ。

あなたが惨めにザーメンを全て飛ばし性欲一つなくなった後に
わたしはその二人とあなたができなかつたことを沢山するつもりです。
あなたが聞くことのない甘い声を出しながら、あなたが
体験できないような奉仕を二人に沢山するつもりです♡

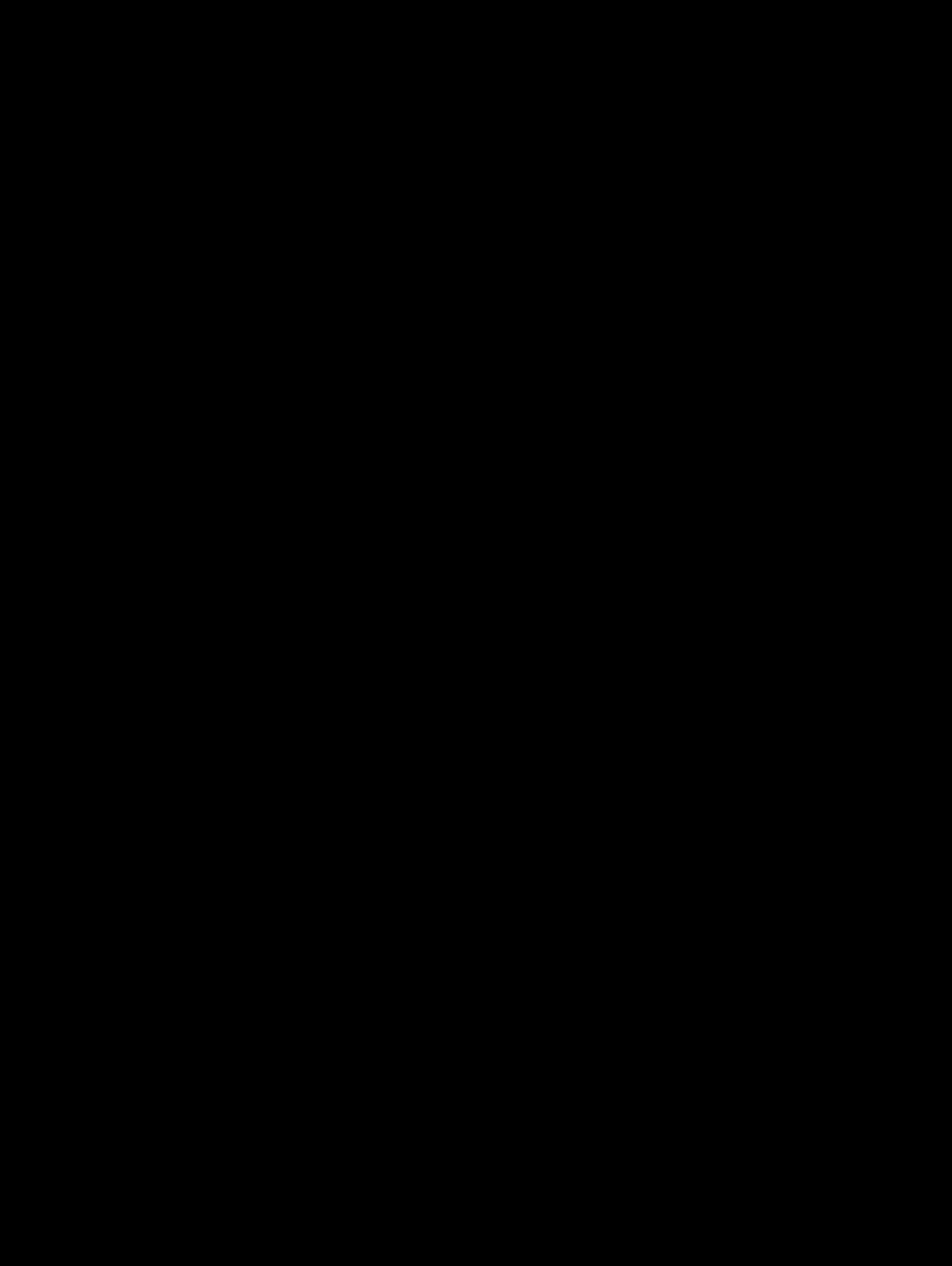


別に見るぐらいなら構いませんからこの部屋使ってもいいですよね♡
あなたではない、況してやはあなたからわたしを寝取ったあの人でもない
男の上に跨ってアンアンと喘ぎ声を上げますよ♡

オチンポもとても美味しそうにいやらしい音を立ててしゃぶりますよ♡
それを見てあなたはその童貞臭い種なしザーメンをティッシュにくるんで
ゴミ箱に捨てるんです
それがあなたのセックスです♡
いいですね？いい？
じゃあもう手コキは終わりです。
残りの吐き出せるザーメンがあるのなら存分にシッコってください♡

……あっそうでした。
素材集めにレイシフトする時はもう絶対女性サーヴァントは
誘わないでくださいね。

あの人との幸せな時間が減りあなたとの苦痛な時間が
増える皆の身にもなつてください。
皆本当に嫌がってますから、よろしくお願いしますよ♡



「えっ！なんで先輩がつっ！」

「これは違います!!
ほんの気の迷いというか…その…」



「とにかく見ないでください！
あっ♡ダメです♡先輩に見られてるからあ…」

「もうっなんなんですかあ…♡♡
はい、ジャンヌさんに全部教えてもらった？」



「だからもうあの人の事も知ってる？
…はあ、そうですか…
じゃあもう取り繕っても無駄ですね」

「先輩とはまだ良好な関係を
築いていたかったのに…残念です」



「いや、信じてたのにと言われましても…
わたしがあの人に好意を抱くのはわたしの
自由じゃないですか」

「えっわたしだけでは、自分の事を
想ってくれてくれていると信じてた？
まあ…そうですね…」


「確かにそういう節はありました…
でもあの人が抱かれ、本当の恋に
気が付いてからは先輩がどれだけ
牡蛎の魅力を知らないかを
思い知っちゃいましたから」





「牡としての魅力は、どれだけ女を
抱いたのかですよ♡童貞の先輩では
どれだけ頑張っても男を知らない処女で
ないとなびきません」

「快感を知った雌から見れば
先輩の価値など露ほど見当たら
ない、臭い童貞人間にしか映り
ませんから」




「先輩がアレキサンダーさんの様な可愛げのある童貞だったら近寄ってくる雌もいるでしょうけど…先輩のルックスじゃ無理そうですね」

「かと言って会話もそれ程上手いわけでもない…絶望的ですわね、先輩はきつと一生童貞確定です。経験値を積む事も叶わないでしょう」


「はあ…さつきからわたしを見つめる目が
エッチですよ。女の人のおっぱいを
見るのは初めてですか？」

「よければここでその未使用なオナニー専用
おチンポを露出させ、わたしをオカズに
醜く扱き下ろす事を特別に許可してあげますよ…
いくらなんでも惨めに先輩が哀れに
なっできましたから♡」



「駄目です、拒否は許しません。
もう私の裸を見てしまったのだから
対価として先輩も脱ぐべきです」

「厚意は受け取っておくものですよ？
この機会を逃したら先輩も生のオカズで
抜く経験なんて一生訪れないんですから
恥ずかしがらずに脱いだらどうですか」




「何故躊躇するんですか？早く脱いで下さいよ。
さっさと脱いで短小包茎ゴミチンポで
シコシコいやらしい想像しながら
扱いてみて下さいよ」

「あっ…つい短小って言ってしまいました
うっかりです」




「あはは、実は先輩が短小で包茎で早漏だと噂になっていましたね、まあ噂を流したのは先輩に手淫をしたジャン又さんなんで、ほぼ明確な情報なんですけど♡」

「でもやっぱ確認したいじゃないですか。あの、何度も特異点を修復してきた偉大なマスターがまさかずっと短小包茎なゴミみたいなチンポをぶら下げて戦ってたなんて…もし本当だったら全てが笑い話になってしまいそうな案件ですよこれは」



「どうなんですか？先輩♡
脱いで証明してみてくださいよ♡
もしデカチンだったら謝りますよ♡
誤った事を謝り、先輩専属の雌奴隷として
生きていくことを誓います♡」



「さあ見せてください。
わたしは信じていますよ先輩♡
先輩は勇敢でカッコいい世界最高の
マスターなんだって」

あの人とは比較にもならない
素晴らしい雄なんだって証明して下さい。
わたしの目を覚まさせてください。
お願いします…さあっ！脱いでっ！」

「でっすっよっね——！！！！！！
知ってました、知ってました！
やっぱ先輩は短小包茎の
しよもない童貞マスタ—
だったんですね♡」

ポロン

「小ちやいでしゅね♡皮に閉じこもって
恥ずかしいんでしゅか♡ほらっもっ
大きくしてみてくださいよ。
流石にまだ大きくできますよね」





「えっうそ…これで完全勃起ですか：
これは予想以上に凄惨な状況ですね」

「本当に価値ゼロじゃないですか。
こんなオマンコ入れても気が付かない
レベルのチンポ存在する意味あるんですか？」

「この人のオチンポと比べてみてください
比較になりませんね。私がそんな
オチンポぶら下げてたら恥ずかしくて
外歩けません。自殺物です」





「まあ、いいです。正直にさらけ出した
ご褒美に私の生ハメセックス見て
シコる事を許します」

そのかわりシヨリ終わったら
さっさと帰って下さいね♡これ以上
気持ち悪い小指の先ほどもない
極小チンポぶら下げた人が同じ部屋にいて
欲しくありませんし…」

「あはは、本当に扱ってる
なんとも間抜けで悲惨な光景です。
おちんぼが小さすぎて往復出来て
いないじゃないですか」

ニコニコ

シユシユ

「それだけチンポが小さいと手コキですら
本来の快感を十分に感じられないんですね」



「ほらっ見て下さいよ♡このわたしのオマンコに挿れられているのが平均的なオチンポです！」

ニコニコ

ニコニコ

ぬち

ゅ

ゅ

ぢち

ゅ

ゅ

はあ♡

はあ♡

「先輩には到底到達できない部分までズッポリ貫かれています♡あっああっ気持ちいいっ♡おちんぽお♡これがセックスです♡♡♡」



「あー初めてが先輩じゃなくて本当によかった！
先輩とだったら全然気持ちよくない最悪な
初体験になっていましたから！」

ニコニコ

ニコニコ

ぬちゅ

ゅ

ゅ

はぁ♡

はぁ♡

ぢゅ

ゅ

「先輩♡わたしのことしっかり見ていますか？

目に焼き付けて下さい！先輩は女の子を

一つも満足させてやれない存在価値ゼロな

ゴミなんだって！誰も相手に

してもらえないんです♡

発情した室内犬と同義です♡」

「あれえ？表情が曇ってきてますよ？
もう出しちゃうんですか？
まだ10分も経ってないのに♡
本当に早漏なんですね♡
あーあ、情けない♡」

ニコニコ

シユシユ

はぁ♡
はぁ♡

ぬち

ャッ

ぢちャッ

「目の前で裸になってる女の子にも
指一本触れられず無様に一人でオナニーを
している癖に、イクのはこの中で
誰よりも早いなんて…
わたしが男の人だったら自殺ものですよ♡」



「ふふ、我慢してますね。
シコるスピードを抑えても無駄ですよ。
先輩は興奮しちやってるんですから
初めて見る生のセックスに興奮して
シコりたくて堪らないんですから♡」
シヨシヨ

シヨシヨ

はぁ♡
はぁ♡

ぬちゅっ
ゅっ

ぢゅっ
ゅっ

「どんなに馬鹿にされ悔しい思いをしたって
シコる事をやめられないお猿さんなんですからあ♡」



「ああ、我慢できない♡ やめたくても
シコる手が止まらない♡ しゅね♡
先輩はそれでいい♡ しゅね♡
皮被りオナニー♡ ショ♡ ショ♡
気持ちいいしゅね♡♡♡」

ニコニコ

シヨシヨ

はあ♡
はあ♡

ぬち

ゅっ

ぢゅっ

ニコニコ

「えっ一人で先にイキたくない？
：しょうがないですね。私もそろそろ…
んっ：イキそうですから…
彼ももう出ると言っています…
これなら先輩も寂しくはないでしょう」
ニコニコ

はぁ♡
はぁ♡

ぬちゅっ

ぐちゅっ

「あっ勘違いしないで下さい
わたしは先輩が未練がましく堪えているのが
うざったいだけですから」





はあ♡
はあ♡

はあ♡
はあ♡

「出る？出そうですか♡はあはあ…♡
わたしもです♡オチンポ気持ちいい♡
あ♡ん♡は♡っ♡イ♡イ♡っ♡♡そ♡っ♡♡
そこお♡♡あ♡っ♡は♡あ♡♡
♡♡だ♡め♡っ♡♡」

ぬちゅっ

ゅっ

ぬちゅっ
ゅっ

シユシユ

シユシユ



「イクっ♡ ああ♡ つん♡ つん♡ 先輩♡ はっ♡
あ♡ あ♡ つ♡ つ♡ まだ♡ 先♡ 輩♡ ♡
限界♡ つ♡ ま♡ だ♡ で♡ す♡ か♡ あ♡ ♡
早漏♡ な♡ っ♡ だ♡ か♡ ら♡ も♡ う♡ さ♡ つ♡ さ♡ と♡
出♡ し♡ て♡ つ♡ ♡ あ♡ あ♡ ♡
♡」

ニコニコ

シヨシヨ

ぬちゅっ

ゅっ

ぢゅっ

はあ♡

はあ♡

出♡ し♡ て♡ …… 出♡ し♡ て♡ …… 気♡ 持♡ ち♡ 悪♡ い♡ ザ♡
早♡ く♡ 出♡ し♡ て♡ く♡ だ♡ さ♡ い♡ …… ♡ じ♡ や♡ ない♡ と♡
わ♡ た♡ し♡ も♡ う♡ ♡ あ♡ あ♡ …… ♡ 無♡ 理♡ い♡ ……
あ♡ つ♡ …… ♡ あ♡ つ♡ …… ♡ あ♡ つ♡ …… ♡
♡ ツ♡ ツ♡ …… ♡



「残念でしたね♡
先輩のゲームンは無駄撃ちです♡
はあはあ…♡ まだまだ彼のオチンポは
元気ですよ♡」

はあ♡
はあ♡

ぬちゅっ
ゅっ

ぢゅっ
ゅっ

「愚かですね…こんな気持ちいい事
すぐ終わらせたら勿体ないじゃないですか
でも…結局一番先に出したのは先輩ですね♡」



「さあ、ザーメン出したのならもう帰って下さい。
わたしはまだ彼と濃密な先輩とじゃ
絶対に出来ないラブラブセックスを
しなくちゃいけないんです」

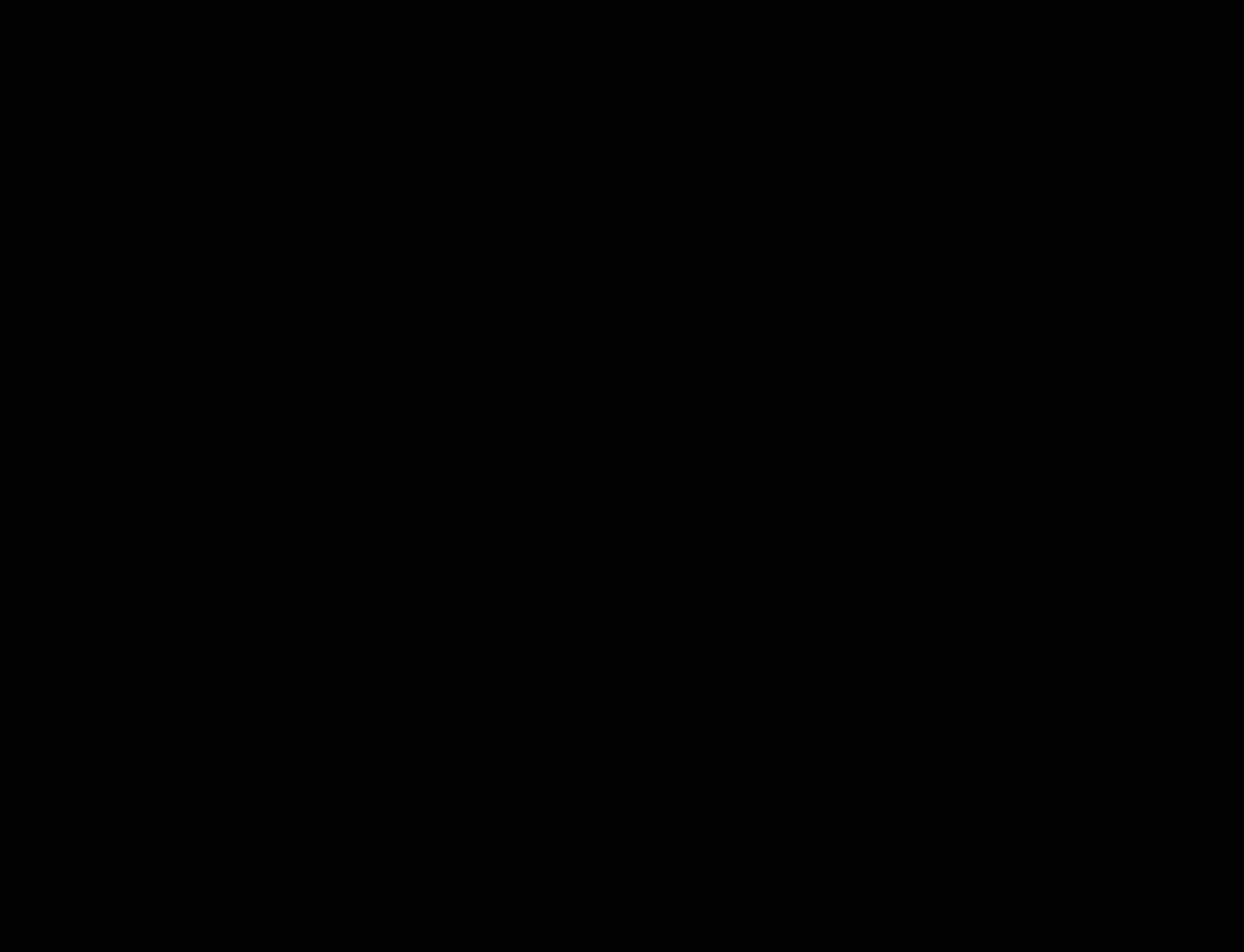
はぁ♡

はぁ♡

ぬちゅっ
ゅっ

ぢゅっ
ゅっ

「あっ床に撒き散らしたザーメンは
ちゃんと綺麗に片付けてください。
そんな劣等遺伝子しか詰まってる
惨めなザーメンは触るのも嫌なんで」



「本当にマッシュさんの部屋を覗きに行ったのですね」

「部屋に入り、最も信頼をしていたパートナーに裏切られ、訳も分からず罵倒され続けた末惨めに言われるがままオナニーをしてきたと……」



「そして出した精子はマッシュさんがセックスをしている中自ら処理し相手にもされなくなつた状況で泣く泣く部屋から出ていったのですか…」

「なんだか聞いてるだけで落ち込んでしまっただけでそんな悲惨な内容ですね」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ



「マッシュさんがマスタアの事を侮蔑し
毛嫌いしていた事は分かっていたんですが
促した私自身そんなことになってしまおうとは
予想もつきませんでした」

「一応体裁だけはずっと取り繕っていた
マッシュさんだったので、見られたとしても
上手く回避すると思っていたのですが……」

シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ



「申し訳ありませんでした。でもこうして
お詫びにまた手ヨキをしておいているのですから
許してください」

「しかし、私が教えたからと言って
文句付けてくる訳でもなく
わざわざ報告だけを行ったマスターは
一体何を求めていたのでしょうか」

シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ



「私との性交？いや、きっとこうしてまた
醜いオチンポを苛めてもらえると
期待してました？」

「ふふふ、無様に包茎チンポ馬鹿にされて
誰とでもしているはずの性交もフェラも
私にさせてもらえず、親指と人差し指だけで
しゅこしゅこオチンポ擦られる事を
想像して勃起しちゃいました？」

シュ
シュ
シュ
シュ
シュ
シュ
シュ
シュ
シュ
シュ



「気持ち悪い…ふふ、本当に反吐が出るくらい
気持ち悪いです。どうしようもないド変態ですね…」

「私が自分の情けない所を曝け出してしまった
相手だからって…初めてそのゴミみたいな
チンポを触ってもらえた相手だからって
懐かれてしまったって困りますね」

シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ



「正直言って迷惑です」

「あの時も言いましたけど
この短小で包茎の気持ち悪いマスターの
オチンポなんて触りたくもないんですよ」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「触るだけで背筋がゾツと震えあがります。
無条件で嫌悪感を逆撫で鳥肌が止まりません」



「なんなんですかこれ、なんでこんなに
気持ち悪いんですか」

「あの人のおかげでオチンポは大好きに
なりました。長いおちんぽも太いオチンポも…
恥垢に塗れたオチンポだって見れば
マン汁垂らしてむしゃぶり付きたくなるはず
なんです」

シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ



「できれば貴方にだって、ちゃんと見てあげたいんですよ。でもこのチンポは駄目。潰してしまいたくなります」

「こんなものをぶら下げているマスターが許せない。あれだけ慕っていたはずなのに今は貴方に何の魅力も感じられないんです」



「……………きっと私はあの人に洗脳させられてしまったんですね」

「人の価値はオチンポの太さ大きさどれだけ雄として優れているのかで決まるのだと深くあの人に刻み込まれてしまったんです」



「となると貴方は最低なゴミクズ同然の無能おちんちんなんですから同じように雄としてのレベルも相応に最低ランクに下がっています」

「心惹かれるどころか無関心を通り越して嫌悪です。ただ単純に気持ち悪く生理的に受け付けられないんです」

シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ
シ



「…理不尽だと思えますか？でも考えてください」

「マッシュさんの部屋に行つて
女の人の腕回りほどの太さの本物のチンポと
見ましたよね」

「ちやんと比べましたか？
自分の粗末な指ほどのオチンポと
その本物のオチンポ♡」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「あれが女の人を満足させられるオチンポです
それに比べて貴方のこの芋虫は…」



「わかりませんか？実際に考えてみて下さい」

「もし仮に自分にいい感じになった
女の子がいたとしましょう。
そのオチンポを見せなくても雄としての
魅力が皆無なマスターには万が一にも
あり得ない話ですけど
一種の妄想としてです…」



「キスから始まり愛撫をし愛を語らう…
雰囲気は最高です。相手の女性が
うっとりし始めた辺りで貴方は挿入に取り掛かり
ズポンを脱ぎます。
すると相手の女性は見てしまいますよね。
芋虫みたいな気持ち悪い包茎が姿を…」

「…この時女性は
どんな顔をしたと思いますか？」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ



「……………答えられませんか？
答えは出ているのに言いたくない…
そんな顔をしていますよ」

「きっと複雑そうな顔をしていますよ
『チンポで人を判断してはいけませんよ…
でもこれは…流石に…』と落胆を隠せない
と思います」

シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ



「だって仕方ありません。女の子なんですもの♡」

「遅いオチンポに跪く事こそ女の幸せなんです。たとえマスターの事を愛していてもこんなもので自分は愛されてしまうのかとプライドをズタズタに引き裂かれてしまっんです」

「しかし、興奮した童貞の貴女はそんな彼女の落胆に気が付けないまま本能のままに挿入を始めるんです」



「マスターの短小チンポは大陰茎のほんの入り口
子宮に届くどころか満足に膣壁に
包まれることもない場所で
スコスコから回りながらも、これが女性の
オマンコかと哀れにも感動を覚える」

「しかし、女性は挿入されたかどうかも
定かではないまま、マスターの
猿の様な間抜けな顔を見せつけられるのです」



「そんな事されれば気持ちほどん
冷めていきますよ。ね。
なぜこの男は自分に無断で跨り粗末なチンポを
擦り付けているのだろう。
なぜこんな男の事を愛し身体を許して
しまったのだろう...と」

「さらに完全に冷めきった女の子に
追い打ちをかけるようにマスターは
得意の早漏癖を生かし、
すぐ果ててしまうんですよね、きっと...」



「いつも満足させられず、自分だけバカみたいに満ち足りた顔をしたマスターを見て女の子はきつと完全に幻滅をしてしまうでしょう。そして呆れながらこう思うはずです……」

「早めに終わってくれてよかったと……♡」



「……………どうです？理解できましたか？
……そう、分かってもらえればそれでいいです」

「でも本心ではまだ納得していませんよ。ま、まあ、いいです。もし本当にそんな童貞を卒業できるチャンスがあったら思い出してみてください」

「私が言った言葉が本当の意味で理解できますよ」



「……………ふう、退屈ですね。
私はいつまでこの粗末なチンポの相手をしなくてはならないんでしょう」

「えっ、ゴミ箱が下にあって集中できない？」



「そうですね…でも、簡単に処理できるからいいと思ったのですが」

「所詮誰のオマンコにも射精できない精子。無駄に吐き捨てられゴミみたいなに捨てられる精子です。行きつく場所が一緒なら同じことじゃないですか」

「しかしくっさいゴミ箱ですね…これ全部マスターがティッシュに吐き捨てたザーメンの山ですか？」

「こんな無駄に吐き捨てて…ゴミ箱を孕ませる気なんですかお似合いですね」



「本来女の子の中に入るはずの精子なのに…これじゃ子種が可哀想ですね。子孫を残す為に出てきたはずなのに行きつく先がオナティッシュユでは救いようがありません」

「まあ、と言っても、貴方には何も言わず受け止めてくれる素敵なお嫁さんではないですか、このゴミ箱は。とつてもお似合いですよ♡」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「ふふ、皆が他の女の子と気持ちよくオマンコハメハメしている間、貴方だけは自ら粗末なチンポを慰めくっさいザーメンをオナティッシュ相手に惨めに吐き捨てていたんですね。それが溜まり溜まってこの量」



「普通オマンコの気持ちよさも知らずに
自らコキ捨てこうしてゴミ箱に処分することしか
できない状況、私だったら惨めすぎてできませんよ」

「流石ですね。本来雌に放つことを目的として
作られた精子を無駄打ちし
こんなティッシュに包んで山のように
捨てるなんて真似：普通の男性ができる
偉業じゃありません」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「誇るべきです。今日もまたザーメンを
このゴミ箱に無駄打ちしましょう。
ほら狙いは定めてますよ」





「なんの役にも立たない無駄ゲーメンが
今日もゴミ箱へ一直線です」

「いつものようにゴミに吐き捨てれば
いいんですよ。
いつもやっているでしょう？さあ」

「駄目ですか？どうしても止めて欲しい？
……はあ、しょうがないですね」

「全く何が不満なんですか。
毎日やってていることでしょうか。
自らゴミ箱へこき捨てている日課を私が
手伝ってあげているだけです。
普段のモチないマスターでは決して
経験できない贅沢なんですよ。
一体何が不満なんですか……」



「はい…どかしました。
これでいいですか？」

「これで心置きなく惨めに手コキで
ザーメン無駄打ちできますか？
女の子の手なんかで満足出来ちゃう
短小チンポはゴミ箱をどかしたくらいで
満足できますよね」

「なら早く出してください。
まだ何か不満があるのですか？
いい加減わがママが過ぎますよマスター」



「えっ……『ゴミ箱から手を離してないから』
……ですか」

「そうですか……マスターは私が
射精した瞬間にゴミ箱を戻し
ザーメンを吐き捨てるのではないかと
心配しているのですね」

ミハッ
ミハッ
ミハッ
ミハッ
ミハッ
ミハッ

「ふふふ、ぶっぶっぶっ。どっちなだと思ひますか？」



「このままじゃ床を汚してしまいますね。
しかしあなたのは汚らしいザーメンに
触る羽目になるのは御免です…
どうしましょうか」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

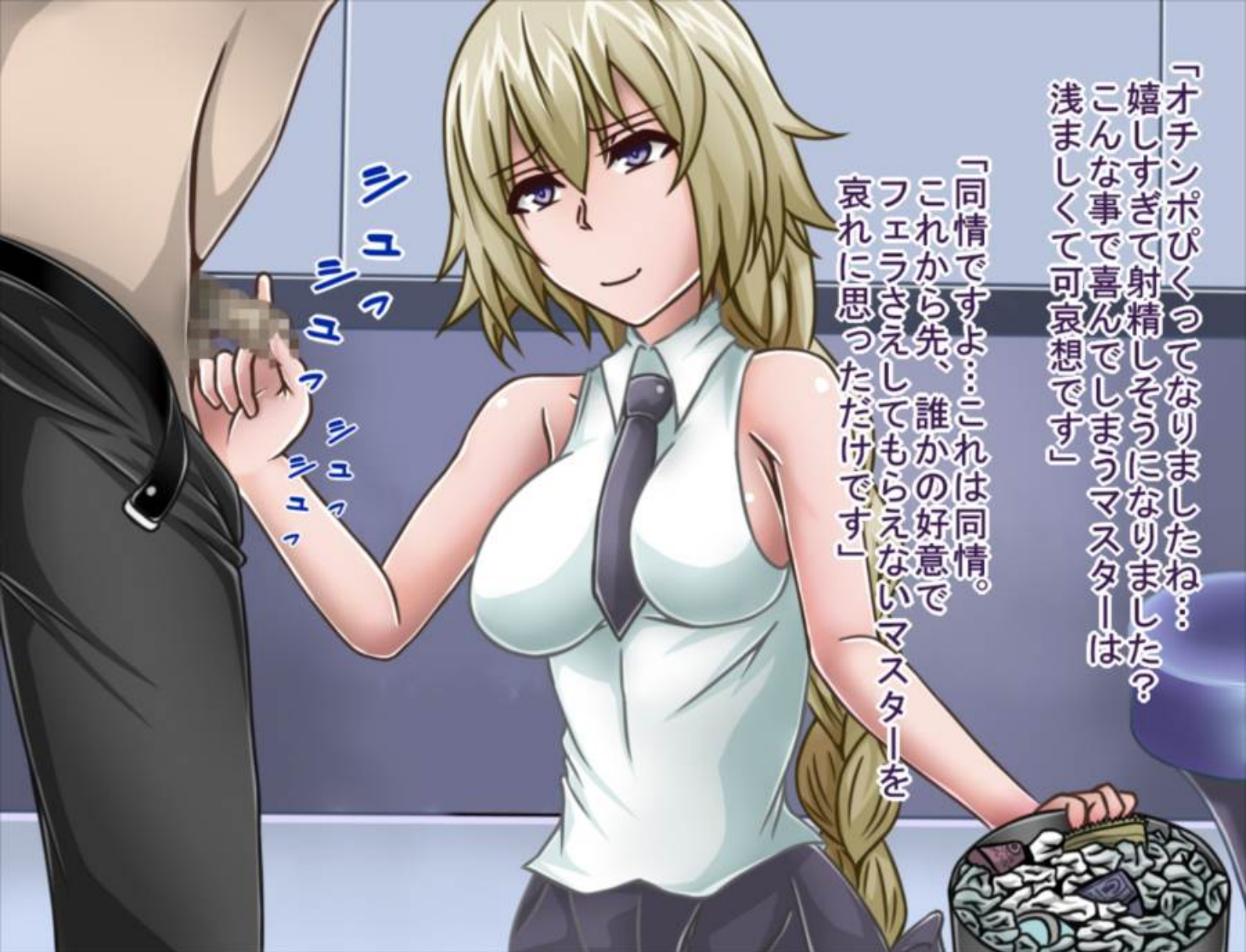
「はあ…仕方ないです、特別に射精した
瞬間に啜えてあげますよ」



「オチンポびくってなりましたね…
嬉しすぎて射精しそうになりました？
こんな事で喜んでしまうマスターは
浅ましくて可哀想です」

「同情ですよ…これは同情。
これから先、誰かの好意で
フェラさえしてもらえないマスターを
哀れに思っただけです」

シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ
シッコ



「射精した瞬間ザーメンをこの金玉一滴も残らずに吸い上げてあげます。フェラされた経験のないマスターなら知らないですよ。自分で射精した程度では吐き出しきれなかった残留ザーメンを絞り取られる感覚は…」

「本来小出しに痙攣しながら押し出されるザーメンを無理やり私が吸い上げるんです」

「想像できないですよ♥オチンポの中を経験したことないスピードで駆け巡るザーメンの排出感はとても気持ちいいと聞きますよ」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ



「そして絞り取られた後でも
私は口を離してあげません♡そのまま二回戦です」

「射精して敏感になった亀頭を舌で
舐めるように刺激を与え、竿を唇が
ねっとりと同じくするようにストローク
します。マスターの金玉は急速に精子を
作り出し意志とは関係なく射精の準備を
始めるんです」

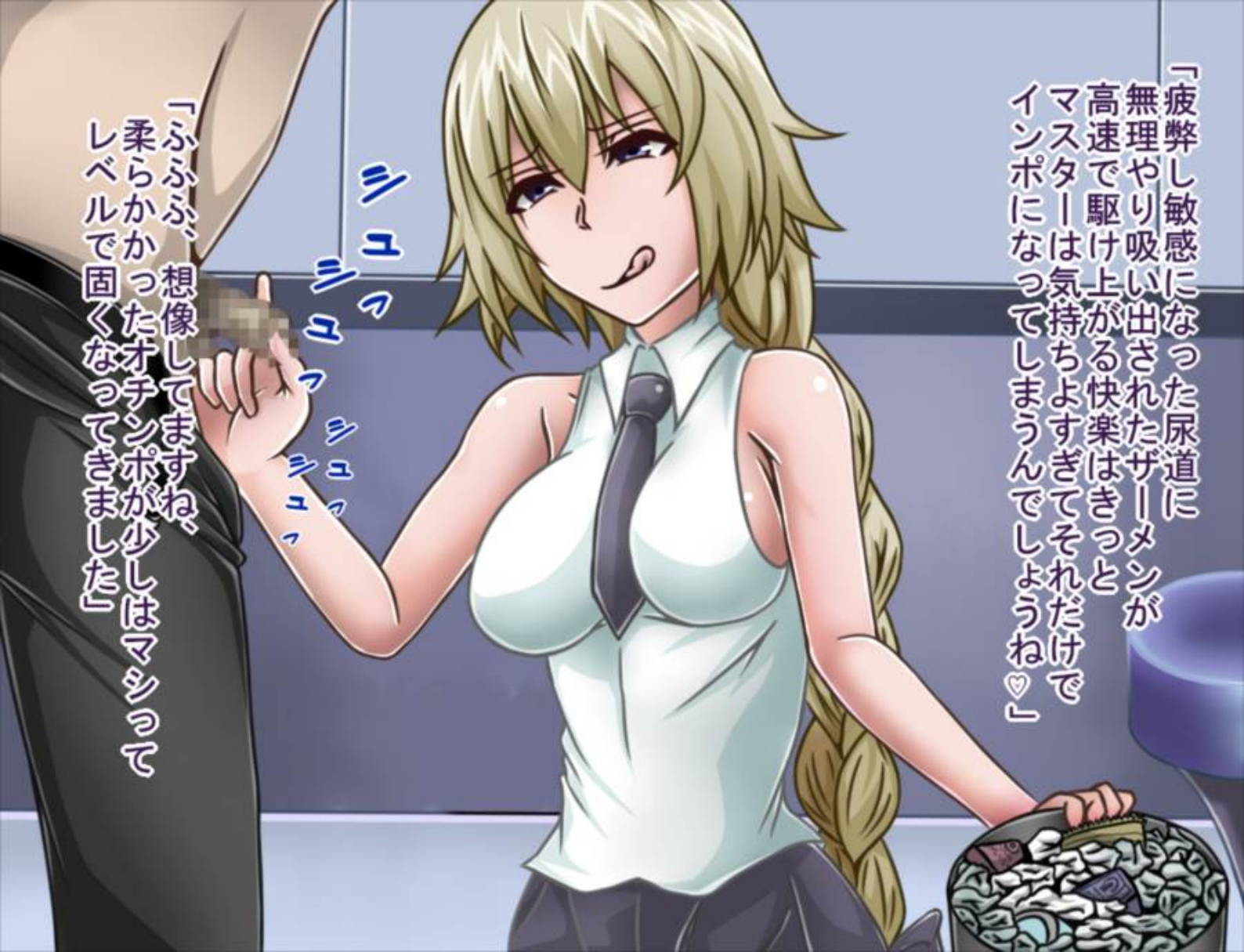
「まだ残る射精の後の多幸感に包まれながら
早漏のマスターは再びあの絶頂を
迎えてしまうんです」



「疲弊し敏感になった尿道に
無理やり吸い出されたザーメンが
高速で駆け上がる快楽はきつと
マスターは気持ちよすぎてそれだけで
インポになってしまおうんでしょね♡」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「ふふふ、想像してますね、
柔らかかったオチンポが少しはマシって
レベルで固くなってきました」



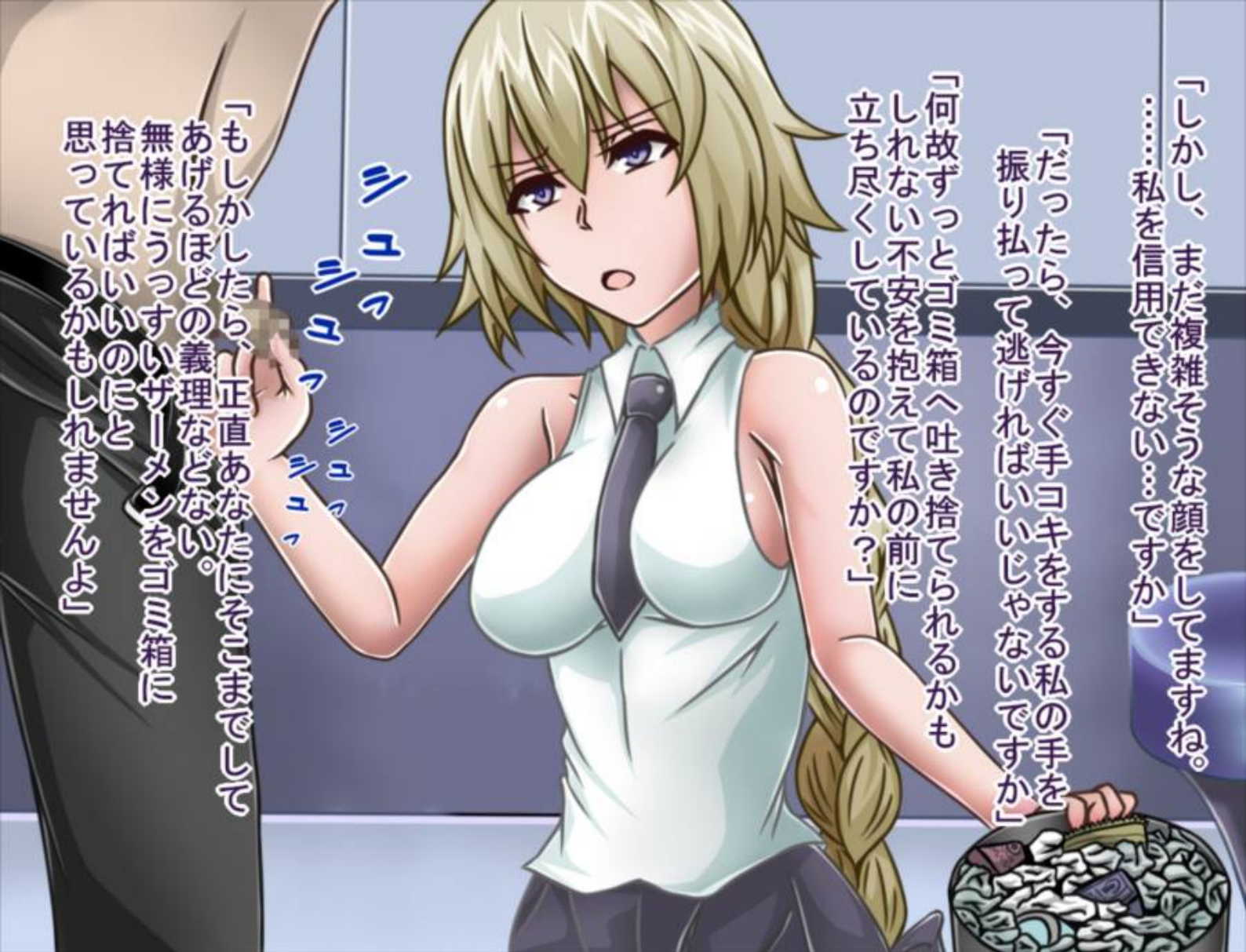
「しかし、まだ複雑そうな顔をしていますね。
……私を信用できない……ですか」

「だったら、今すぐ手コキをする私の手を
振り払って逃げればいいじゃないですか」

「何故ずっとゴミ箱へ吐き捨てられるかも
しれない不安を抱えて私の前に
立ち尽くしているのですか？」

「もしかしたら、正直あなたにそこまでして
あげるほどの義理などない。
無様にうっすいザーマンをゴミ箱に
捨てればいいのにと
思っているかもしれませんよ」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ



「実際、マスターが嫌がるまで
ゴミ箱を片手に手ヨキをしていたのですから、
そちらの方が確率は高いでしょう」

「逃げるのは自由ですよ。
本気で嫌がる貴方を無理やり抑え
射精させるほど私は貴方に興味がありません」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ





「.....」

カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ
カカカカ

「.....」
「.....」
「.....」



「なぜ逃げないんです？
私がマスターのわがままを受け流す為に
適当な事を言っていると考えているはずなのに……」

「ふふふ、分かっていますよ。
でも、もしかしたら……私が本当に
フェラしてくれるかもと無駄な欲望に
駆られ振り切れないんですよね」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「本当に愚かなマスター……。自分でも
情けないと思いがちながらもこんな些細な望みに
みっともなくしがみ付いて情欲に囚われている」

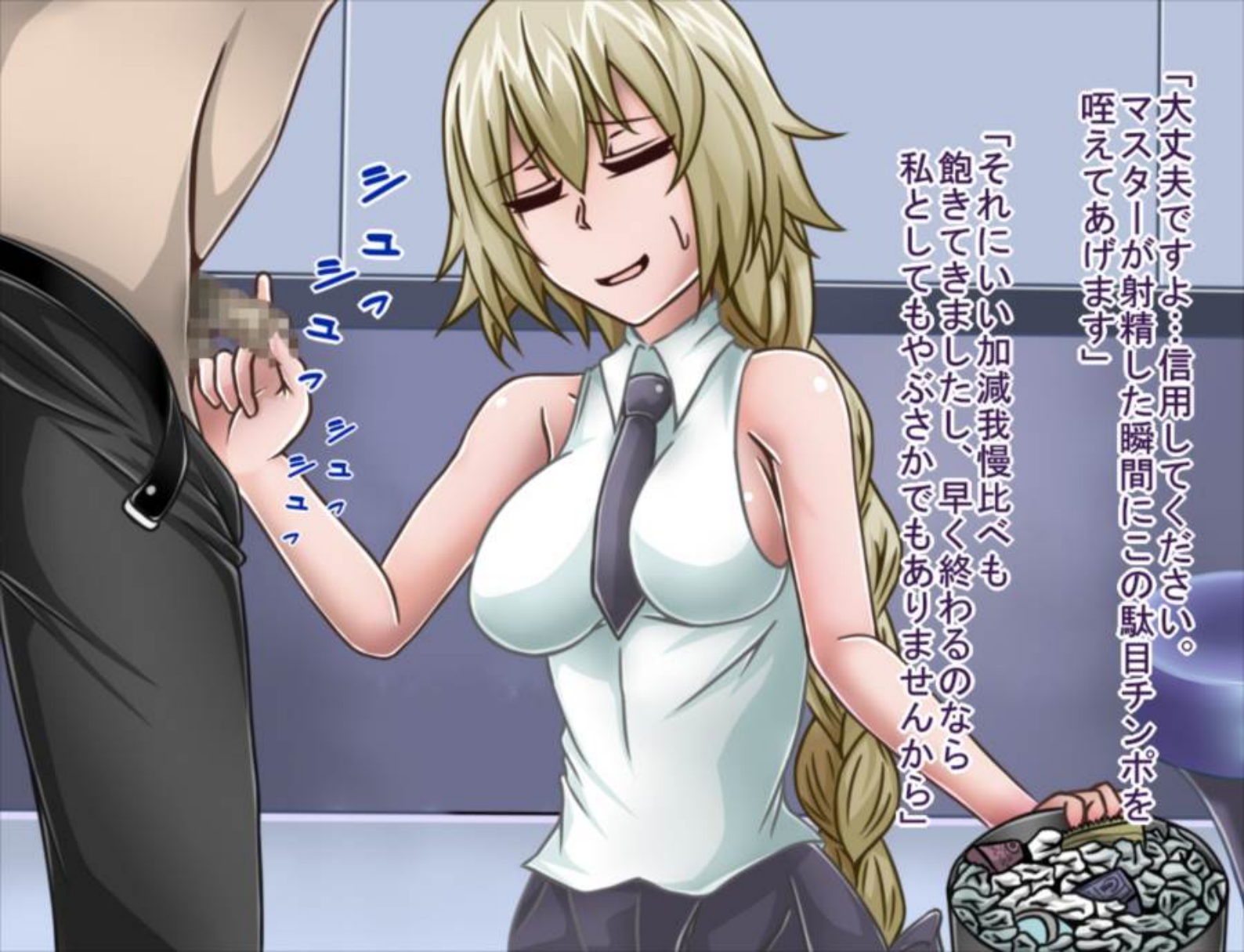


「…はあ、そんな顔しないでください。
貴方を見ていけると本当に惨めで
哀れになってきました。
もうあやふやにせず
普通にフェラしてあげましょうか」

シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ
シユッ

「だって、このままじゃ貴方も
引き下がれないですね。
貴方も少しは報われても
いいのかもしれないし…」





「大丈夫ですよ…信用してください。
マスターが射精した瞬間にこの駄目チンポを
啜ってあげます」

「それにいい加減我慢比べも
飽きてきましたし、早く終わるのなら
私としてもやぶさかでもありませんから」

「ほら、安心してくださって：あーもう、変な事言わなければよかったです。いい加減射精しないのならこの手ヨキも止めちゃいますよ？」

「残り時間後一分です。あと一分以内に射精しないと私はもう手ヨキも止めます。フェエラもなしです。残念でした♡」

「でも早漏の貴方ならできますよね？ほら後40秒です」



「30秒：だらしない顔に余裕がなくなってきたね。
快楽に意識を集中させて必死に射精しようとする貴方の顔は少し面白いです」

「15秒：頑張ってください。
もう時間は無いですよ」





「10、9、8……もうちょっとです。
下半身に力を入れてください」

「5、4、3、2、1」

カッ
カッ
カッ
カッ
カッ
カッ
カッ
カッ
カッ
カッ





.....』
はあ

.....』

.....』

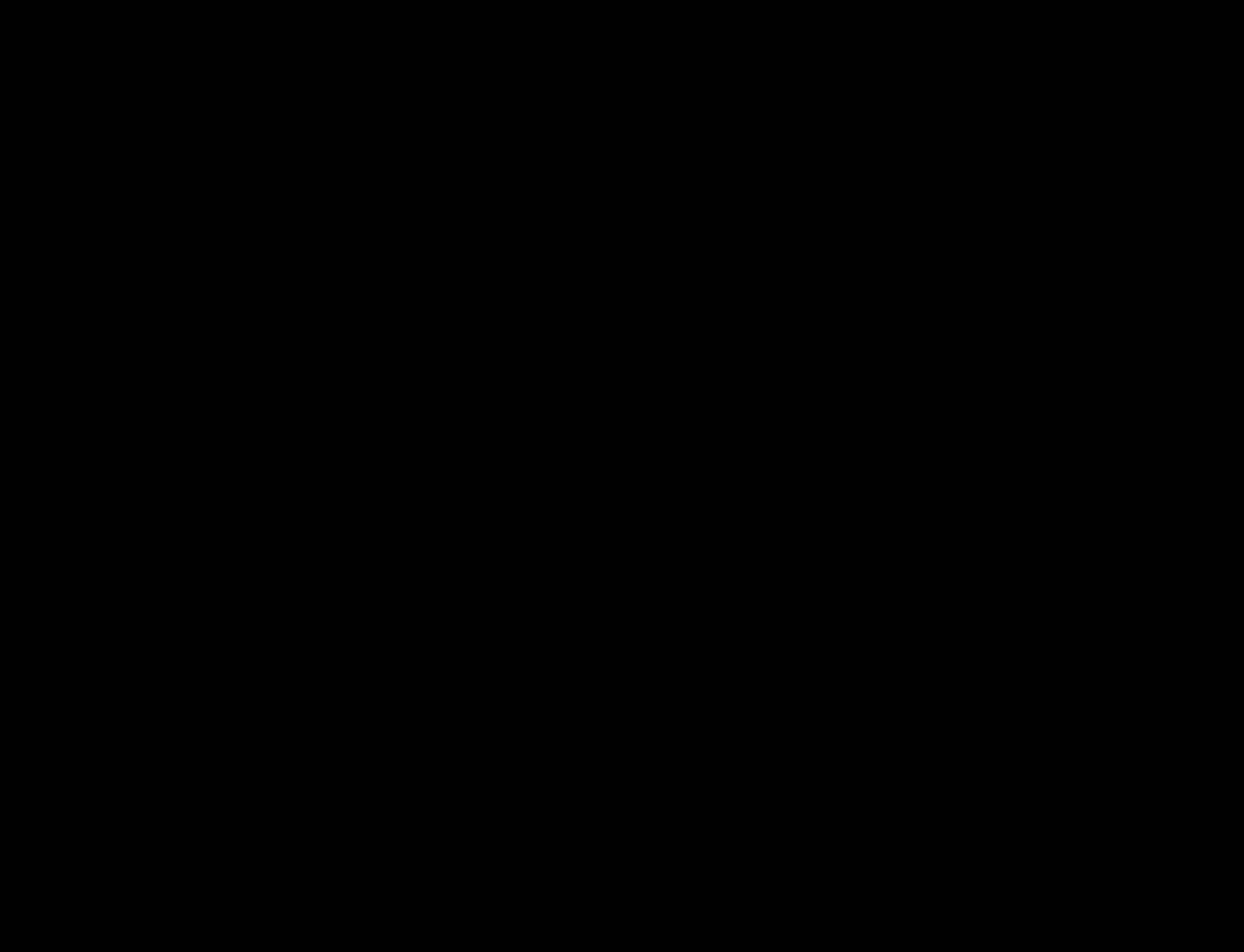
.....』

「……………えっなんですか？
終わりですよ、終わり」

「もうマスターの惨めな
ゴミ箱受精も見れたんで帰ります」

「お疲れさまでした」





「そう…そんな事があったのね…
辛かったでしょうに」

「カルデアの風紀が乱れている事は
気が付いていました…
でも私も一緒になつてそこに参加していた
だらしない聖女です、申し訳ありません…」

「さらに、あなたが一部のサーヴァントに
ぞんざいな扱いを受けていた事に
気が付けず悠悠自適に暮らしていたなんて…
悔しいわね、もう聖女失格じゃない…」



「はい：私にできる事なら何なりと
命令してください。
だからこうしてあなたの前で
横になっているのですから」

「だらしのない身体でごめんね。
乳首も女性器もこんなに
使い古しちやってもう真っ黒…
あなたには綺麗な身体のまま捧げたかったわ」

「ええ：うん、そう。
全部『あの人』に調教されちゃった。
えっセフレ？うーん、5人はいるかな」



「乳首を弄られるだけでイけるようになったし頭の中はもうセックスだけでいっぱい。でも不思議とそれに関して後悔したり自虐的になったりはしないのよねえ」

「勿論最初はひどく落ち込んだりもしたわよ。でもやっぱり気持ちいい事には勝てなかったし段々と自分を責めることも忘れて快樂へ没頭するようになった」

「でも…それのおかげで…貞操観念が緩んだおかげで…こうしてあなたに身体をゆるす事ができるんだからあなたにとってでもいい事じゃない」



「これからどんだん私でテクニク付けて見返してやりなさい。あなたもこっち側に来てくれればもう後ろめたさもないし歓迎するわ♡」

「大丈夫。誰でも最初は初心者なんだから童貞だからって気にすることはありません。あなたはちよっと遅すぎるかもしれないけど…」

「あはは、まさかあなたの初々しい童貞が余っていたなんて以外に盲点でしたね。もうとっくに誰かが奪っていると思っただわ…（…あの人に抱かれてからは全くあなたの事を忘れていたし）」





「ほら、あなたも脱いでください。
大丈夫、私はもうちよっくらいい。
オチンポが情けないからって
えり好みする程度のビッチじゃないから。
エスコートは任せてください」

「……………えっ」

「確かにこれは……小さい……わね」

「これを誰かに見せつけるのは
確かに恥ずかしい……ですね。
……………こんな気持ち悪いチンポ
……始めて見たわ」

「しかも皮かむり……まあ勃起すれば
剥けると思うから……
別に包茎だって悪くはないわよね」

ぽろんっ



「えっと…どうすればいいかしら。緊張で勃起できていないみたいですから、ちよつと刺激を与えたほうがいいですよね」

「キスしてから愛撫して…
ああもう、いつも即ハメだから正しい順序が分からないわ!」

ぽんっ

「……………てか、私の裸を前にして勃起していないって何なのよ。これだから童貞はめんどくさい!」

「とっ、とりあえず仕切り直しましょうか! 緊張しているんだから仕方ないですよね!」



「えっ……もう勃起している？
……私のオマンコハメたくて我慢できない？」

「うっ、嘘でしょ……
これで勃起しているってアンタ……
びっくりするくらい粗チンじゃない」

「本当にそれで精いっぱいなの？
もうちょつと頑張れない？
……そう、これが限界なのね」



(フオローのしようがないわね……
話には聞いていたけど
予想の半分もないじゃない……)

(これじゃいくら経験を積んでも
女の子を気持ちよくさせる事なんて無理ね……
どんなにテクニクを磨こうとも
こんな粗チン見られたら
全てが台無しになっちゃうわ)





(てか…ぷぷ…ありえないわよ……
何あの小ささ…あれじゃオチンポじゃなくて
ただの突起物じゃない)

(駄目だ…哀れすぎて見ていられないわ…
笑いが抑えきれない…ぷっ…ぷっ…
小っちゃっ！オチンポ小っちゃすぎ！)

(なにあれ、あんなものオマンコに入るの…
逆に！絶対無理だってあんな
粗チンじゃ入り口にだって
たどり着かないわよ)

(これじゃ童貞で仕方ないわね。
…だって今思うとマスターの顔から
粗チン臭が漂ってるもの！
あんな魅力ない雄じゃ
誰も女の子近寄らないわけだわ)



（てか、仮に私のオマンコ使ったからって、これは童貞卒業になるのかしら。満足に挿入すら果たせないじゃない…ふふっ！ならマスターは「生童貞ね」）

（生まれながらの童貞、死ぬまで童貞。
ぷふ…ふふふふっ…！）

（なにそれ…！理不尽すぎるわ…あはははははは…マスターが何をしたって言うのよ…！でも、面白すぎるわ！）



「えっああ……なんでもないわ。
でもそれで、ぷふ……！勃起しているのなら
問題なく……できますね」

(駄目よ……私！落ち着きなさい。
これはマスターの為にして
あげている事なんだから。
私の気持ちなんてどうでもいいの！)





(心を無にしないと…マスターのちんちんは
確かに哀れだけどそれとこれとは別よ
とりあえず今日はマスターを
満足させてあげないと…)

「ふう……。はい、大丈夫です。
さあマスター、日ごろ溜まっていた
鬱憤を全てこの私にぶちまけてください」





(.....あっ入ったの？
本当に全然気が付かなかった。
陰茎をなぞられているだけかと思った)

(これは本当にどうしようもないわね。
沢山オチンポを啜え込んだ
今の私のオマンコでは何も感じられない)

(あっでも動いたら少し分かるかも.....
入り口をちゅぽちゅぽ
出し入れしている事だけは分かるわね)



(……うーん。仮にこれがセフレとして機能するかのテストだったら……)

(硬さ……失格、あの人の半立ちオチンポより柔らかいんじゃない？
腰の動きも……スローセックスが得意な人くらいのスピードしか出てないわね)

(童貞のマスターには私の弱い所を突くテクニクもないわけだし……
てかそもそも届かないし……失格ね
太さは……論外ね、膣壁が余るほどってなんなのよ……別に私オマンコガバガバって訳でもないのに……傷つくわあ。
そして長さは……考えるまでもないわね失格よ失格)



(つて、私何考えてるのよ!
だから今日はマスターが満足すれば
それでいいの!
私の気持ちなんてどうでもいいじゃない)

「どうですかマスター?
初めての女の子の膣内は気持ちいい?
……そう、よかったです。
えっ、もう出そう?……ちよっと早くない?」

IP
ニ
っ
IP
ニ
っ
IP
ニ
っ
IP
ニ
っ

「えっ、あっ、もう出ちゃった？
我慢できなかった……って……
…そ、そうですか。あっ、いえいえ
勝手に中出し決め込んだことについては
どうでもいいです……」

ぼそっ

……むしろそれ以前の問題というか
別に子宮に届くわけないし」

どひゃ

っ

(これは…最悪じゃない。
出すの早すぎ…何挿入れた瞬間
射精してるの？
入れた事にすら気が付かれないまま
勝手に興奮して射精って…
これはもう一種のかまいたちじゃない)

(まあ…すぐ出してくれるのは楽でいいわね。
マスターのピストン正直不快感しかなかったもの)



「これで満足しましたか？
童貞卒業おめでとうございます
(私判定では完全に童貞のままなんだけど……)」

「まだ足りない？もっと経験を積んで
見返したい？」

「……えっと……それは困りましたね……」

「なんと申しましたらいいのか……正直このオチンポ……
いや粗チン……いやおちんちんでは
残念ながらどれだけ経験を積んだって女の子を
気持ちよくさせるのは不可能ですね」



「いや、やってみなければ分からないと言われても…
もうさっきので完全に結論出ちゃってるし…」

「硬さもない、太さもない、包茎、短小
極めつけに早漏、オチンポの駄目な所
ロイヤルストレートフラッシュと言いますか…」

「まあ、納得できないのであれば
続けてもらっても構いませんが…
その粗チ…いやもう粗チンじゃ無理よ」

「でも、アンタの性欲が満たされていないのなら
満たされるまでやればいいけど…
下手な考えは止めた方がいいんじゃない？
わたしの事なんで気にしないです
性欲のままに思う存分オマンコ使いなさい」



(ふう…まあ説得はできたけど
まだ納得はしてないみたいね。
角度を変えて微妙に違う所を突いて来るわ。
そんな隙の入り口突かれたって
何も変わらないっついの…)

(これはまあ…一部の女性サーバントが
マスターの事を毛嫌いするのも分かるわね。
雌として覚醒した分、童貞丸出しの
マスターを優越感から見下す子も
中にはいるけど…マスターだって
自分の器も理解できないで迫ってくれば
誰しも嫌悪感を覚えるわ)



(純粹に気持ち悪い…必死に間抜け面
晒しながら当たり前もしない子宮目指して
腰をへこへこしてる姿はどんなにマスターの事を
恋慕しているサーヴァントだって一気に
冷めてしまうわね)

(はあ…早く終わらないかなあ……
世の中にこんなにつまらないセックスが
あるとは思わなかったわ。
安請け合いですぎたかしら……
どんなに短小でも多少なりとも
形にはなると高を括っていたあの時の私を
懲らしめてやりたい気分よ)

IP
ニ
ッ
IP
ニ
ッ
IP
ニ
ッ
IP
ニ
ッ

「……………えっどうかって？
……なんとも思わないですよ
どうぞ続けてください。」

ぽとっ

はあ…私を感じさせようとか
もうどうでもいいじゃない…
…さっさと終わらせなさいよ」

IP
ニ
っ
IP
ニ
IP
っ
IP
ニ



「……そこも感じないです」

「……だからそこも感じないって」

「……感じません」

「……こんな所に枝毛できてる」

「……あっ聞いてませんでした
なんて言いました？」

IP
ニ
っ
IP
ニ
IP
っ
IP
ニ





(そういえば荊軻がまたセフレ取られたって
ヤケ酒してたわね…)

(今日で3日目…そろそろ誰かを
デストロイ仕掛けるそうだから止めないと…)

(いい加減つまみのレパートリーも
尽きてきたし…
新しいレシピも考えなきゃ…
何がいいかしら…)





「…………えっ！はい！寝ていませんよ！
大丈夫です！」

(やっぱり寝落ちしかけた…)



「しかしここまで何もないと
流石に退屈ですね…
もう今日はここまでにしませんか？」

「また私が暇な時いつでも
やらせて上げるから…
マスターもこれ以上は身体に毒ですよ」

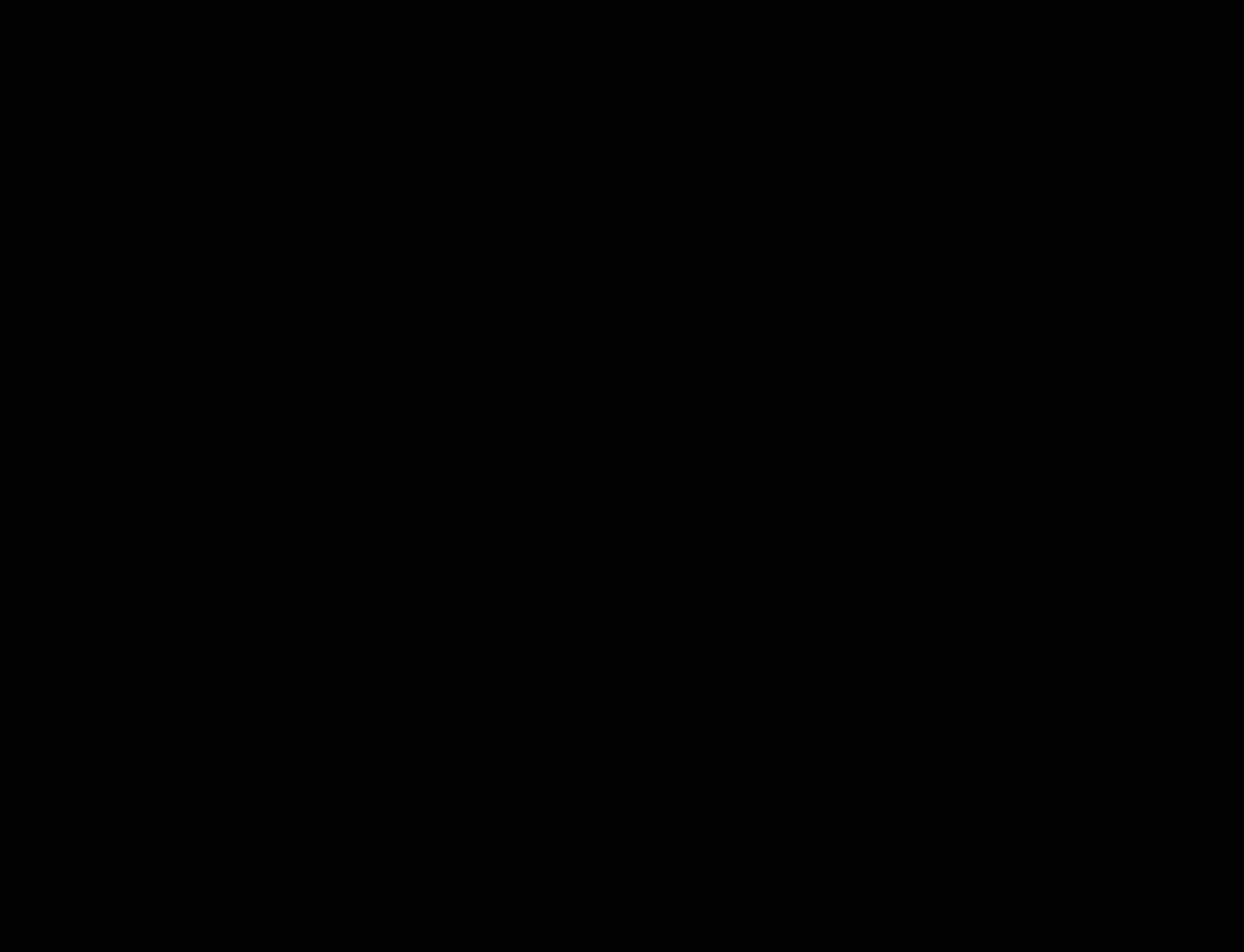
「じゃあ明日もやらせてくれるって？
…うーん、ごめんなさい明日は埋まっています
明後日？…明後日も埋まっていますね
その次の日も、はい、埋まっていますねー
ごめんなさい」





「ならこうしましょう。
私が空いてる日に『私から』マスターへ
報告します。
です。その日まであなたから
『決して催促せず』一人で鍛えててください
自主練です」

「はい、ではそういう事で…
自主練、頑張ってくださいね♡」





「相変わらず立派なチンポねー
奉仕し甲斐があるわ」

「金玉もパンパン♡
ちよつと抜かないだけで
どうしてこんなことになるのよ…
んん♡全部絞り取るわよ」

「と、その前に…報酬はちゃんと
用意しているでしようね。
私はタダではしてあげないんだから」

「ん♡それならいいの♡
じゃあ…いただきまーす♡」

んちゅ♡ちゅうう♡じゅるるる♡

「はあ♡呼吸するだけで
むせ返りそうになる程雄臭い匂いだわ♡♡」

んちゅ♡

ちゅ♡

「これが何人も女の子を扱った
力強い雄の臭いなね♡♡
頭がクタクラしちゃう♡♡」



「んん♡ちゆう♡チンカスも美味し
亀頭に塗されたチンカス一つ一つが
私には宝石に見えるわね♡」

「竿も汗とカウパーを凝縮した
くっさい臭いがするわね♡
こっちも頂きます♡」

んん♡
♡

ちゅ♡
♡

「んん♡ぬちゅ♡……んふふふ♡
さいこ♡頭のちゅ♡
支配される♡」



「んんうなにい？私の一番好きなモノですってえ？
……それは勿論オチンポに
決まってるじゃない♡♡」

「んんうううう♡♡♡ぬちゅ♡
じゆるるる♡♡♡
はあ…オチンポおいしい♡♡
もうオチンポしゃぶれるのなら
他に何もいらないっ！」

「ああ♡♡チンポしゃぶるだけで
身体が敏感になっちゃう♡♡
オマンコも隠し切れなくらい
濡れちゃうう♡♡♡」

ちゅ♡♡

んん♡♡





「なんてこんなに美味しいだけじゃなくて
気持ちいいのよおお♡♡
勝手に雌スイッチ入っちゃううう♡♡
生臭いオチンポ臭を口と鼻で
堪能させられて発情しちゃうううう♡♡♡♡」

「ぢゆるぢゆりゆりゆり♡♡
んぱっ…レ回オ…レ回ぢゆばっ♡♡
じゆるじゆううう♡♡♡♡♡♡」

「じゅりゅっれる…ちゅっ…
…ん？あら。こんな所で珍しいじゃない
マスター」

「私のヤリ部屋にくるなんて
初めてじゃない？あんたも私を
買いに来たの？」

「ええ、報酬さえくれればどんな
くっさいオチンポでも新品同様綺麗に
してあげるわよ♡ 勿論私の口で♡♡」





「ちなみに大体はくっさい
ドロドロ特濃ザーメンでも許しちゃうから
その制度はないようなもんになってるけどね
そのあとフエラで発情したオマンコを
ぶっといオチンポで犯してくれるなら
逆に払う時もあるわね♡♡」



「でも……その噂で聞いたけど
アంత短小らしいわね。
それなら報酬はしつかり頂くけど
大丈夫？ 私は高いわよ」

「その為に宝物庫沢山回ってきたから大丈夫？
……わざわざご苦労様ね
まあ、あるのなら文句ないわよ。
ちよつと順番待ってなさい」

「ごめんなさい♡色々盛り上がっちゃって……
2時間くらい待たせちゃったかしら？
でも逆になんてそんな生真面目に
待ってるのよ。その時間あれば他の
女の所行ってフェラでもなんでも
させてもらえよかったじゃない」

「ってこのチンポじゃ無理よね。
見事な粗チン。
噂は本当だったみたいだけど……
これは想像以上に……」



「短小かあー…粗チンって
しやぶった事無いけど…
まあ絶対に燃えないわよね。
こう…チンポを見た瞬間に来る
ググツツとした下腹部への衝撃が
全然走らないもの」

「むしろキシヨいわね…これ。
こんな小さい包茎見た事無いから…
もはやチンポとして認識できないわ…
得体のしれないキノコが生えてるみたい…」

「うーん…厄介な相手が来たわね
でもどれだけ気持ち悪くてもチンポはチンポ。
刺激を与えれば射精するし
一回射精させちゃえば文句は言わせないわ」



「ん？なに？こんなになんて小さくても大丈夫か？って……
ああ、大丈夫よ。これくらい小さいければ
扱いやすいしね。皆ここへ来る男どもは
毎回大きくて遅しくて奉仕するのも
大変なのよね！」

（なに聞いてきてんのよ……嫌に決まってるでしょ。
こんな皮がむって気合も入っていかない
ふにゃちゃんなんて。しかもこれで勃起してる
とかじゃないわよね……）

（まあ、実際に噂通り短小だったわけだし
早漏だって噂も本当なんでしょう。
適当に刺激与えてさっさとイッてもらって
帰らせましょう……）

「じゃあ、始めるわね。んん♡んちゅっ♡
うええ…」

（味も最悪じゃない…普通だったら愛液と
精液がべったりと付着した雄の味が
全然しないわ…女の子の子宮を
犯したことのない童貞味…）

んちゅ♡

ちゅ♡



（チンカスもこの皮の中に沢山詰まっているでしょうけど…剥く気になれないわあ…）
（本当だったら包茎なんて極上の濃厚チンカスチーズが熟成されてる宝物庫のようなものなのに…）
（マスターの粗チンでは汚いカスにしか感じられないわね…）

（本当にあり得ないわね…）
チンポしゃぶらせてこんなにも萎えさせるチンポも珍しいわ…
ある意味貴重な経験よわね。
もう二度と経験したくないけど…）

んっ♡
ちゅっ♡





「出したいのなら我慢しなくてもいいのよ。
遠慮しないでそのまま出しちゃいなさい」

「え？まだ報酬分楽しんでないから
抑えて欲しい？
…ふうん、なるほど」



「さあさあ♡ ぴかぴか○○○○○○○○○○」

「あにええええええええええ」

「さあさあ♡ ぴかぴか○○○○○○○○○○」



.....』

とびや

ん



「はい、終了——♡♡♡」

「まあ一応高い報酬支払ったものね
こんなものの5分で終わらせちゃ
勿体ないって思う気持ちも分かるけど。
1回出しちゃったなら終わりだから♡」

ぞろぞろ
お



「二回戦？ないわよ。ぷりぷりの特濃ザーメンくれたら自動延長してるんだけどこんなうっすいザーメンじゃ無理ね」

（ふう…こんな簡単に射精しちゃうなんてね。ちよっと深く啜えただけで射精って…早漏にも限度があるでしょうに。他の男だったらちよっとしたサービスなんだから私が悪いわけじゃないわよね）



「二回戦？ないわよ。ぷりぷりの
特濃ザーメンくれたら自動延長して
るんだけど
こんなうっすいザーメンじゃ無理ね」

（ふう…こんな簡単に射精しちゃうなんてね。
ちよっと深く啜えただけで射精って…
早漏にも限度があるでしょうに。
他の男だったらちよっとした
サービスなんだから私が
悪いわけじゃないわよね）



でも、こんな簡単に終わらせられるなら
いいカモじゃやない。
こんなやつすい快樂だけ与えておいて
沢山貢いで貰いましょう♪」

「また宝物庫回って沢山稼いだら
また来てちょうだい。
私はいつでも待ってるから♡」

（あーあー、あんなに喜んじゃって。
惨めだわあ…本当だったらもつと
この後サービスが色々あつただけど…
最後までたどり着ける日は一生なさそうね）



「じゃあもう次の男の人呼ぶから
退いてちょうだい。
見学は自由だからカーテンの裏から
見ても構わないわ
（シヨック受けなきゃいいけど）
でも邪魔はしないようにね」



「はい、お待たせー♡
いや、そんな待ってない？
…あはは、そうね。速攻5分で
終わらせてやったから」

「本当に最悪だったわよー
あんなゴミみたいなチンポ始めて見たわ。
大体大きさはあんたの親指くらい。
いや、冗談じゃなくマジだつて」



「まあ、私も最初は勃起してないのかなーって
思っで刺激してあげただけど…
ぷぷ…ピクピク動くだけで
ちつとも大きくならないし…
結構勃たせなきゃーって頑張ってたのよ。
で、そしたらアイツなんて言ったと思う」

「『イツイキそう…ツツ!!』だって!
あはははははははははは!
こんな…ソフトタッチみたいなの
もので…イキそうって…
しかもつまりあの親指みたいなチンポで
完全勃って!あはははははは!
私の頑張り返せって!」

「いやもう、それから
『まだ報酬分楽しんでないからー!』って
マスター腰引いちゃって……っ!!
いや早くイキなさいよ!
てかどれだけ無様な醜態晒すのよ!」

「えっ? ないない。そんなゴミみたいなの
耐久力の粗チンに慈悲なんてないわ。
逃げられない様にこうパクっと口の中に
飲み込んであげたわ!」

「それであっけなく射精！
カスみたいな量のザーメンびゆるっと出して
終わってたわ。あの時の顔情けなかったわー。
『ああ出しちゃったー』とか言ってる
残念そうにしてた」

「アイツとしてもまだまだ我慢するつもり
だったんでしようけど。
あの勃っても勃たなくても同じような
粗チンじゃ無理よ。あの程度の快樂に
耐えきれない粗チンが
なんで私の所へ来たのかしら」

「マスターの粗チンはオナニー以上の快樂を
与えてはいけけない腐れチンポなんだから
おとなしく自分の手で鎮めてなさいっての。
ホント気持ち悪かったわ」

「それと比べてこのオチンポは大好きよ♡
遅しくて、雄臭くて。あの粗チン
見たあとだから余計素敵に見えるわね♡」

「んちゅ♡じゅっレロレロお♡♡♡
はあ：最高♡♡全財産を支払ってでも
味わいたい極上のチンポね♡♡」

（でもやっぱり一番最高なのは
『あの人』のオチンポ♡
マスターのゴミチン上書きするため
あの人に後で土下座して頼み込んで
こようかしら）

（貢物も沢山マスターから徴収できたし…
これだけあればあの人だって
喜んでくれるはず♡♡）

んちゅ♡
ちゅ♡



「てことで予定ができたわ
申し訳ないけど今日はフェラだけで
いいかしら？埋め合わせは明日絶対にするから♡♡」

「いい？ごめんね♡
え？でもその代わりアレやってくれ？って
…まあいいけどアレやっちゃうと
チンポ好きが止まらなくなっちゃうのよねえ。
顔もかなり不細工になっちゃうし…
でも仕方ない♡行くわよ」

んん♡♡

ちゅ♡♡



「んはあああ♡♡口内から辿って鼻の中で
広がるこの臭い♡♡すっごく臭くて
興奮するのをおお♡♡♡♡」

「プチュツ♡又チュツ♡はあっ♡
んんっ♡ちぬちゅっんちゅっ♡ちゅぴちゅぱっ!」

「オチンポが鼓動してるっ!ザーメン出すのね!
欲しいっ!ザーメン欲しいっ!」

「じゅりゅるるるるららら」

「じゅるっじゅらららららら」





じゅわんっ
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん

じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん
じゅわん

出してえ出してえええええ♡♡
回にとろとろとした喉に♡
引っかかるくらい濃厚ザーメン♡
ぶちまけてえええええ♡♡♡♡♡♡♡♡



「んぶっふうんん~~~~
んごくっごくっ~~~~
ふうんっっ」

（あああああああ♡♡♡♡

ザーメンきたあああ♡♡♡♡
喉っ！喉イキしちゃうっ！
喉の性感帯をなぞりながら落ちていく
ザーメンに無限イキしちゃうっ♡♡♡♡

ズリ♡リ♡リ♡リ♡

ズリ♡リ♡リ♡リ♡♡♡♡♡

(気持ちいいいいいい♡♡♡♡♡)
ザーメンが私を体内から犯すううう
ザーメン様に頭支配されるううう♡♡♡
)

「んんう…こきゅっ♡…こきゅん♡
…ふー♡ふー♡ふうう…♡」

(ザーメン…イキ…さいこうう…
これだけで本当にバカになっちゃう…♡♡♡)

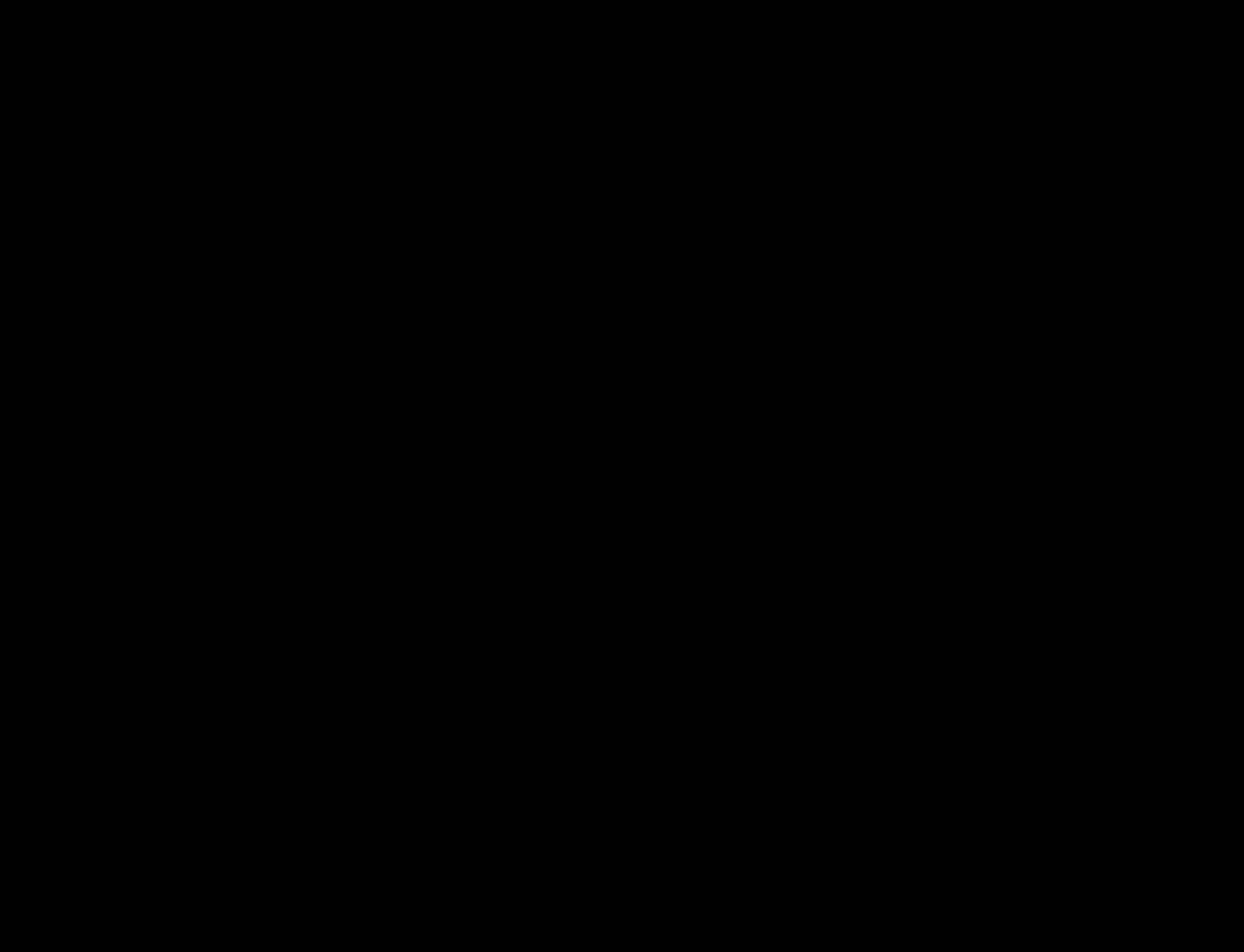
(マスターのゴミ精液とは偉い違いよね…♡
これが女の子の子を気持ちよくさせる
本物のチンポよ…♡って完全に忘れてたけど
マスターがまだカーテンの裏から見てるわね)



（ふふ、分かる？本物のチンポってのは
女の子の性感帯何処を犯しても
イキ狂わせることができるのよ♡
マスターのへpoi粗チンじゃ♡
オマンコさえも満足にさせられないのにね……♡♡）

（悔しそうに見てるわね♡
もう少し我慢すればあのサービスを
受けられると思ってるのかしら♡
でも残念♡アンタには一生してあげない♡
次からは手コキで十分よね♡
オナニー専用粗チンなんだから♡
それでお似合いよね♡♡）





「センパイ♡こんなに面白い事になっっているのに何故BBちゃんに教えてくれなかったんですか？」

「センパイが短小包茎早漏の粗チンだって理由で色んな女性サーバントから嫌われてもジャンヌさんから聞かなければ気が付きませんでしたよ♡」

「これは罰です♡…と言っても今の先輩にとってはご褒美ですか？
誰にもオマンコさせてもらえない先輩は疑似オマンコで満足するしかないですもんね♡」



「どうです？気持ちいいですかー？ふふ♡
どうしようもないお猿さんです♡
穴さえ開いていればなんでもいいんですね」

「早漏と聞きましたけどこんな
気持ち悪い粗チンから本当に
ザーメン出るんですか？私には
出来損ないにしか見えなくて
射精機能付いてるんですか？」

「別に要らないですよ♡
女の子を気持ちよくさせる事すら
できないゴミチンポなんですから
もし仮に射精できたとしても
役に立たないんでそのまま
オナホに出しちゃってください♡」



「オナホでしたら先輩のゴミ遺伝子でも
文句も言わず受け止めてくれますしし
ぷぷ…:なによりお似合いですよセンパイ」

「でもまさか、センパイにこんな弱みが
あったとは思いませんでしたね
色々マスターさんには最近強く出れない
Bちゃんなのでこういう所で
攻めていかないとですね」

「えっ？マスターこんなオチンポで
も気持ち悪くないのかって？
そりやもう気持ち悪いですよー♡
こんな粗チン触りたくもありません♡
だからこうしてオナホ使ってるんじゃないですか」





「でも他の子だったら近づくともしない？
：へーそうなんですか。そう考えると
少し違うかもですね
わたしは気持ち悪い先輩の情けない姿を
見たいんですし、嫌いは嫌いでも
他のその子達とはベクトルが違うかもしれせん」



「ありがとうって、なっ、なんですか！
別にわたしは新しいオモチャとして
センパイを相手してるだけであって
急に感謝されても意味わかりませんし
調子狂っちゃうじゃないですか！
てかそんな全裸で横たわって
しんみりされても格好付かないですよ？」

「って事でオナホに集中してください！
潰しますよ？折角Bちゃんがこの短小ゴミオチンポを相手してあげてるんですから、みっともなく喘いで私を楽しませることが先輩の任務です」

「でも、本当に小さいオチンポですわね！
一応SSサイズのオナホを持ってきたんですが…
すっぽり入るところか？
少し余ってしまうなんて
短小チンポ悔ってました」



「センパイが満足にオナホでコくのなら
特注で作ってもらわないと
駄目みたいですね
オナホですら相手がいない先輩可哀想——」

「てかセンパイ、オナホ向いてないんじゃない
小さいですか？先輩のオナホは
コくの難しいんでしょ
……カレシさんだったなら
こうはならないのに」



「ん？カレシ？いますよ。当然じゃないですか。このカルデア内で付き合う相手もいない童貞ってセンパイだけですし。皆毎日のようにまぐわって、肉欲の限りを尽くしているんです♡」

「悔しくないんですか？私たちが職員さんにはしたなく無条件でタダマンを差し出している間ずっとセンパイは一人寂しくシヨシヨシヨと誰にも入れることない包茎オチンポを慰めているんですよ…切ないです」



「職員さんが女の子の子に遠慮なくセクハラしていても
帰ってオカズにすることしかできない♡
私たちがアンアン喘いでオチンポ啜ってる時も
一人でシヨシヨ♡ザーメンなんて好き放題
どこでもぶっかけられるのにマスターは
許されず一人ティッシュにぴゅっぴゅ」

「情けないですね♡ダメ雄さん♡
包茎♡早漏♡短小♡ゴミ♡
ダメな所沢山あります♡
言ってるだけで日が暮れてしまいです♡」



「本当に惨め♡もしよければBBちゃんが
生のオカズも提供しましょうか？
別にセンパイに見られたからって
どう思うわけでもないですし♡
そっちの方が面白いセンパイが見れそうですし♡」

「あはっ♡すごい興味を示してますね♡
なんかカワイイです♡
もし、センパイが望むのであれば
BBちゃんをセフレに……」



「本当に惨め♡もしよければBBちゃんが
生のオカズも提供しましょうか？
別にセンパイに見られたからって
どう思うわけでもないですし♡
そっちの方が面白いセンパイが見れそうですし♡」

「あはっ♡すごい興味を示してますね♡
なんかカワイイです♡
もし、センパイが望むのであれば
BBちゃんをセフレに……」

「……ってあれ？なんでこんな所にいるんですか？」



「私がここに居るのを聞いてきた？
：もう今、もうちよつとでセンパイを
私のオモチヤ奴隷にできたのにー」

「紹介しますせんパイ。
この男が私のカレシさんです
まあ職員ですから顔なじみでは
ありますよね。
で、そのカレシさん、今日は
センパイの相手をしてるので
帰ってください♡」





「ちよっと！帰れって言うてるじゃないですか！
怒りますよ。えっ、嫉妬？
……もう、バカじゃないですか」

「いいです、この男は無視します。
センパイもこの可憐なBBちゃんだけに
集中してください♡」

「えーと…仕切り直しです。
とりあえずセンパイを罵倒しましょうか」



「てもかもう出ちやいます？
結構切羽詰まった顔してますよ。
んふふ♡このオナホをBBちゃんの
オマンコだと思ってザーメン
ぶちまけてもらっても構いませんよ♡」

「オナホでしか射精できない
センパイの唯一許された特権です♡
日頃の妄想で鍛え上げられた
童貞パワーを発揮する
チャンスですね♡」





「でも忘れないでください
あなたはおオナホでシッコされて
惨めにオマンコも使わせてもらえず
ほんのり温かい無機物に興奮して
射精してしまっさりシッコ
胸に抱いてシッコ



「でも忘れないでください
あなたはおナホでシヨシヨ
惨めにオマンコも使わせて
ほんのり温かい無機物に興奮
射精してしまっさりシヨシヨ
胸に抱いてしまっさりシヨシヨ

ボクン♡

くちゅ♡

♡

「ひゃん……」

「ちよつと！どこに手を伸ばしてるんですか！
オマンコ触つていいなんて
許可した覚えはありません！」

「嫉妬してくれるのは……まあ
嬉しいですけど……
今はセンパイの相手を
しているのであって！」



「あんっ♡ううう…♡♡♡ソコっ…ダメですう♡♡♡
弄らないでください…♡♡♡」

ボクン♡♡
ボクン♡♡

「いや、でも…はい…
逆らうなんてそんなつもりは…
はい…自由にBBちゃんの
オマンコ触ってください…♡♡」





「せつ、せんぱい……♡気にしないでください……♡
あつ……♡続けますよ……♡はあはあ……♡」

ビクン♡
ビクン♡

くちゅ♡
くちゅ♡
くちゅ♡
くちゅ♡
♡
♡

「せんぱいは……そちんの身分を
わきまえてええ♡あつ♡
本来わたしがオナホコキするだけでも
贅沢なの……♡あつはっ♡」

「どうしたんですかあ…セシパイ
視線がとつても…あっ♡エッチですよお♡」

「もしかしてこの…んんう♡
煽情的なBBちゃんに見惚れて
しまいましたかあ…あっ♡あうん♡」

ボクン♡
ボクン♡

くちゅ♡

くちゅ♡
くちゅ♡
♡

♡

「でもお…あんっ♡んうっ♡
あひっ、ひっ、ひあっ♡
しゅごい♡んふっ♡ 擦れるう♡
あふっ♡あふうん♡」



「あ、ああ……っ♡んうう……♡
ああんっ♡らめっ♡イツちやう♡
イツちやうからあ！」

ビクン♡
ビクン♡

「もう♡なんでこんな確に
私の気持ちい所攻められるんですかあ♡
ああああんツツ！だめええ♡」

「はひっ♡はひっ♡ひっ、ひぐうう♡
ひやうっ♡……んウツ♡……んふあっ♡」





「もっとお♡もつと攻めてえ♡
ひいっ♡……♡はひっはひっ♡……♡すっ♡い♡……♡♡」

「もう……大丈夫ですって♡
別にあなたにうつつを抜かした♡
わけじゃないですからあ♡
……あっうん♡」

ビクン♡♡
ビクン♡♡

くち♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡
♡

「意外と束縛強いですね……♡
いえ、BBちゃんは好きですよ♡
そういうところ♡♡」

「んっ♡キスですかあ♡それはまた後で♡
部屋に帰ってからたっぷり♡ね♡
ふふふ…沢山してくれませよね♡♡」

「もう…エッチなカレシさんを
持つと大変ですな♡
どこでも盛っちゃって♡
ワンちゃんみたい♡♡」

ボクン♡
ボクン♡

くち♡

くち♡

♡
♡

「でも私もあなたを見てるだけで
盛っちゃうお猿さんなので
おあいこですな♡♡
もつと指…かき回してください♡♡」



「あんっ♡ソコお好きいい♡♡あぁっ……♡♡
 あっ、あううん♡♡あはあ、あううん♡♡
 あっあっ♡あっ♡」

「オマンコお♡切なくなっちゃうう♡♡
 オチンポ欲しくなっちゃうう♡♡
 でも…ここでは…センパイが見てるので…♡♡
 指で我慢します♡♡」

ビクン♡♡
 ビクン♡♡

「あはあ♡ひぐっ♡気持ちいいです♡
 はい♡大好きですよ♡♡
 あの人は比べられないですけど…♡
 それはしょうがないですよね♡」



「でもあの人はわたしの相手してくれないし！
だってたらわたしはあなたに全力で尽くします
あなたが一番です♡♡」

「あっはあ…嬉しいですか♡あつ…♡
はっ♡はっ♡あつ♡あつ♡く♡あつ♡
ああ♡ああ♡あつ♡あつ♡分♡かり♡ま♡し♡た♡か♡ら♡!
気持ち♡は♡し♡つ♡か♡り♡ま♡し♡た♡か♡ら♡あ♡あ♡…
は♡ひ♡い♡つ♡!♡ん♡あ♡あ♡い♡い♡…♡!♡」

ボクン♡
ボクン♡

♡ち♡♡♡♡

ニコニコ

ニコニコ

「ええ♡洪水みたいですよって？
しょうがないじゃないですかあ♡
オマンコつかき回すごつい指がつ♡
気持ちよすぎるからあ♡あ♡」





「ぐうう♡あぐう♡あはあ♡
あ、あぐう♡いっ♡あつ、あつ♡
はっ、はあっ♡」

「いくっ!もう絶対いくうう♡
もつと強くしてええ♡イクっ♡
ひぐっ♡ひっ♡ひやうっ♡あっ!」

ボクン♡
ボクン♡

「イタラツツツツ.....」

ど
び
ッ
ッ

くち

くち
ッ
♡

♡



「はあ…はあ…はい…気持ちよかったです…♡
ありがとございました…♡
ちよつと休憩して部屋に帰りましょう♡」

ボクン♡
ボクン♡

「はあ…はあ…はあ…はあ…」



「ふー.....」

「.....」

「.....なんか安心しますね
.....うして手を握っていると♡♡」

ぎゅっ♡♡

にぎゅっ♡♡



「えっセンパイどうしました……？
もう帰る……？あっ……そうですか
それでは、また」



「センパイ…行っちゃいましたね…
えっ？邪魔モノがやつと消えたって？」



「ええ、まあ確かにそうですが…
そんな言い方しなくてもいいじゃないですか。
一応英雄さんですよ？でもまあ流石に
カレシが来たのなら空気読んで
もつと早く帰れって話ですよー」

「まあ、童貞だから仕方ないかもですが…
そういう空気とか体験したことが
無いから分からないんですよ童貞だから」

「いえいえ、本当にただの暇つぶしですよ？
センパイの相手なんて…
…好き好んでするわけないじゃないですか」

「てか、見ました？あの包茎短小チンポ！
流石にあそこまで小さいと引きますよねー
あははは、やっぱそう思います？
あなたが始め来た時笑い堪えてるの
わかりましたもん」

「あれじゃ誰も相手してくれないのも
分かりますよねー。BBちゃんのカレシが
あんなへポチンポじゃなくてよかった♡♡」





「いや、チンポで自分を選んだビッチのくせだって……
その通りですから反論はしません♡
……あんっ♡♡」

「ちよっと！こんな所で服脱がさないでくださいよ！
もうっしょうがないですわね……
センパイもいなくなっただし
ココで……ってもう♡行動が速いですー♡♡」

「あんっ♡♡はあ♡きやんっ♡は気持ちいいです♡
くあっ♡あ♡はあ♡きやんっ♡はひいっ♡♡
んああ♡いっ♡……♡」